

FRN 79-2 -9 — 2

資料名 送迎解釋紀事

刊・写

軸・帖

1 冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680 - y 3

撮影 富士ゼロックス(株)

昭和54年3月7日

福岡市民図書館

送迎解釋紀事

680

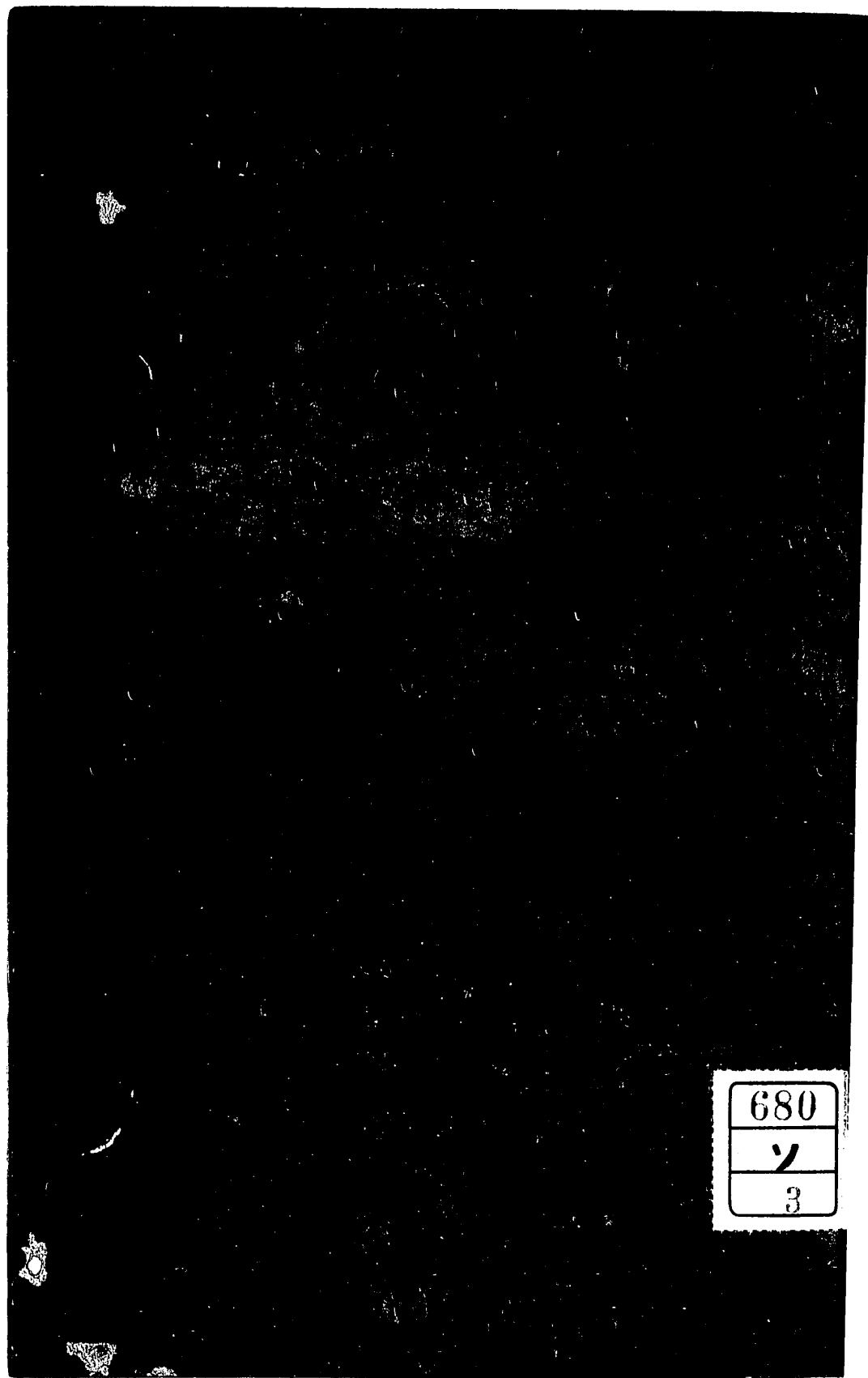
ノ

3

PAT. NO. 542819

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

680
7
3

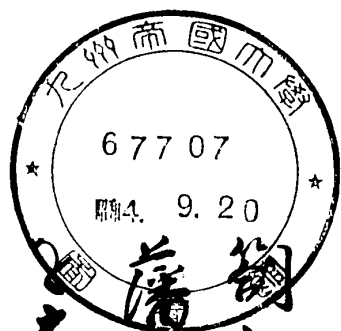
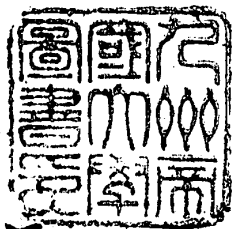


680
ノ
3

680
ノ
3

送迎解釋紀事

緒言



此六師送迎の始末、明治之末を改官より
福至藩に徴し、一、同十一月藩知事黒田忠知
より海軍編輯に命ぜられ、即藩の日記
を記し、撰録し、編して一冊として、今迄
藩に送り、向清師、嘉治末に送られて呈せし
る事ありし、譯書として送せし、
後、大失火、新撰清達同、西書館焼

し既く八袂に満ちて善政甚く其業
は堪えられず廢棄せしむ熱望ありけ
る書文こそ拙くれども言実なり明勅の經
歴して然る如く事すまじき一室の虚
沛りく半白の玄徒なり一齋を從二位右
衛門將之平修藩の師と起して防せし園
攻め三山を破り端々舊國を逮て平く
へしに終る兵連なりと祐記して天下を亂
る人々と憂へしに下は命し上は師と違へ

代長の兵を解き待ての憾を釋ししめ
れけり中興盛業の一端緒とせしむる斯
偉切ありしかども其後の聖教せしむる
者遂げざるなり天下を亂る人跡を平
國に記述せしむる言はれ且其命ししを
し解紛端をせし諸君乃切實に保てし
に及すへしと悲憂ありしかども是は術
ありし人相謀る謀に誠が部撰あり
し修書廢棄せしむる心ありし者告し

し歌ハ杖ヲ踊えり素夜思ふ其業
は堪え候へり廢棄せり熱思ふけ
書文こそ拙くれりの旨実なり朋輩の経
歴して物如く事すまふとして一室の虚
静なり半句の妄使なり舊を從二位右
衛門將之千休藩の師と起して防せり園
政め三山死也痛く舊國にて米を平く
へり候へり兵連なり祐記して天下大亂
となんと思ふに下は命なり師と起へ

代長の兵を解き待ての威を釋しり
れけり中興盛業の一端緒とけきり斯の
偉切ありけり其の聖教せりり
素夜思ふ其業は堪え候へり熱思ふけ
書文こそ拙くれりの旨実なり朋輩の経
歴して物如く事すまふとして一室の虚
静なり半句の妄使なり舊を從二位右
衛門將之千休藩の師と起して防せり園
政め三山死也痛く舊國にて米を平く
へり候へり兵連なり祐記して天下大亂
となんと思ふに下は命なり師と起へ

に帰し紙と潤筆料と賜ひてふ山本
親吉も託き先づ書の系文盤環竹本
のまゝと留まり舊主と世に同志と云ふ
舊主と作慕する人あり故きと傳へ此
次と難きと云ふ解しめたりと解して
剛澤一良史氏も託して中興盛業の史
をいふ書片の印業と載せ天下に傳へ
傳播せられんことを希ふのみ

明治二十二年八月

八十二史音奇長野誠叔達識

送迎解釋紀事卷之一

松平美濃守齊博

于時右近衛權中將
後長傳從二位

領内親前

國老宰府八五所眾寓右近送之始末

文久三年癸亥四月廿一日傳奏所宮宰相中於

定切了了通所達方之

外夷拒絕之期派來五月十日所決定相成

候同並軍政相調職夫持攘了方之被仰出候事

四月

同月廿二日所宮宰相了了傳川口軍家恭へ

從朝廷許尋し屬し二廿所苦書并奏聞

書寫多むと細腹く

拒絶之事来る廿二日期限に及んば
委細言ふ事

大樹上信前澤系十日と作書上信を
内仕候意度より所候事より加茂行方
供奉より蒙別候し 龍岡威戴主
晴速・東下波より急勿傳其次第候
来之様形等候候澤共撰夫より大樹尚
守中より不可行なる方音より澤系
波より撰夫より候水戸中他言より澤系

就て関東人心只菅大樹に在郷に留
留し居る事難成候撰行を兼り候
者中より長く申越尾澤大他言より候
候急死より申越り候事より関東に候
大樹東下に在るに代り人心漠然に
撰夫難仕候事候候より候に期限延
び候事

一橋内府拒絶應接候に付事

當時内府より拒絶應接候候に其期
限に言葉に候所より有し以共大意に一時

和親交易之結孔之來 貴國之不
任用港事故園國人心之志人台之議を
以断然拒絶し及應接候事

攘夷期限之事來月十日迄拒絶以定
付方及 貴國の獨列藩へは布告下付事

四月廿日 家茂

同日幕府より布告有之

攘夷の後四月十日て及拒絶は許達あり
名を以て心は自國海岸防禦は以て教
事を為されしとて抑攘はしむべし

以上

四月

次年攘夷の後三月 朝廷幕府より布告は被
給に付る人心は疑義方々難之候今奉旨
十日夕於中廣 敵意違事幕議随順し
之より海軍通行し美和は被拒絶又四月十日
一橋中他言慶喜は攘夷し 取方と奉し東序
は之れを志し不敗を 勅旨難費徹中を志し
許免し後より敵意違事幕議随順し度は
考へて四月十日迄異人並被拒絶し軍

船歩沈メ又上陸人家焼掛切迫及メ以テ
津中ノ小倉藩ニ前渡共停頓シテ以テ
藩ト火君藩ト交知セリト云々藩より
之ヲ以テ少品ノ出ルヲ及メ決シテ幕府
ノ命ヲ以テ之ヲ拒絶シテ以テ断方セ藩
ト少君藩ト遠キ事ノ罪有之ヲ知ルモ藩ト不
和ニ成少君より幕府ノ國ハ九月十日先
中板倉伊賀守勝靜より夫國拒絶ノ後於板
倉談判中ニ付藩より不協本國ニ歩掛見合
ノ程有違候 朝廷ニ七月十八日 初使西郷

少將ト薫セ藩より下向外夫及押攘候 敵
感不糾方之廢希ト多傳又藩藩ト去年武
我ト生友材ト英人ト云々候ト情ヲ斬捨ト未
高六月十八日英初七艘藩海ニ渡リ之ヲ
有シニ付由由分解イテ以テ七月二日緊要
ニ藩船より門より夫初ニ發砲及押攘候
因事外是一時ニ多渡シテ方夫渡り及メ最
早に國に告発シ候ト云々 宸機ト者必
然ト云々候ト心痛熱意仕テ先王武シテ
奥ニ少親合ニ云々候夫ト云々一轍ト云々

候半を成切く見せし方上系 敵意相伺
布ハ上清為筋盡力に仕及念く以て病重
膝行も成業する為代婦より所を慶精注
委細り言へ家老たる者係上系一より又之い
〜七月サる夫時を因縁より其書に系
家老より候し候し

今を拝撰并席に遊覧し候に 敵意
越え違ふも待水に建ても其 宸機を
心底より其意を在る所係上系仕 宮中
所時宮巨細も難なる事な付て其書

く病重仕多き候に 膝行仕兼て候
膝下御書に在る所 其書に其意を
所祝儀し候に在る所 其書に其意を
不害の御書に在る所 其書に其意を
在る所 其書に其意を

七月サる

松平久成書

右書初め其意に八月二日教書に命より
所官宰相人より其意に八月二日所官宰相より
其意に其意に其意に其意に其意に其意に

松平秀徳書

方今此く不審の時賢君上幸し心得候事
持病并發多末様外難成候下所吉登
素 大寺且清和向も同友と神妙
思召方上幸有し候 清沙法候事

八月

右前より何書上せ在、均々相教藩に盡
力して御心を整へたる七月廿五日家来川越
又より直陳相希内勝聲多人を侵配後藩

お藩に書きたる上幸因旋に書越し出さ微力
なり 今國許を御三才お成程に事なり
國安し方今に群賢不衆侍親なる心力と
そを要ぬ、自ら國許中迄抵する人、旅
の用心に力と成せ 宸襟も安し通に御意
に入らる所配藩にけ方しとて、おなま有
しとて御意に、お傷合大幸なる人、いやは教へ
けよと云ふも、それより秋言に、お相教通に
云、おしるも是言なり、侍藩より、八月十日、藤
井良純様、徳油の向成次信義より、い、け、お、上

事は修明を以て久しき節に先づいふ所なり
なるも不承機合と云ふも一機力と云ふも
激するに言ひあはしむる也其意を以て
七人曰く言はれぬ處見たりと云ふ中少
事共しやと云ふは切也及て九月二日より
家光黒田山城増懸待暇後二藩より来る右
上京因縁と云ふ事と人合し

九月七日に後藩より右寺具物と云ふて主代
之様物より開く方城中で慶順名代・弟世國
澄く物護久良と云ふ護美より上京と云ふ事

戸合より力と云ふも万石心保佐頼と云ふ人
肥前藩より後藩に後藩二日と云ふ力と云
戸合より力と云ふも一日と云ふ事其國より力と
云ふも後藩より力と云ふも九月十六日平服和衣
実より云々其年と云ふて是れ其時合辭に
云はれし所なり其後右寺具物と云ふは其
いふ所より其國物候と云ふ事と云ふも其代
事家より上京と云ふ事と云ふ事と云ふ事
有し

八月十三日為侍費より云々其は作出と云ふ事

方々

今方乃撫天所祈願之和國 行孝 祚
武帝所降壽日社事 所祈誓所迄為
所祝征軍後乃在其上 神宮 行幸
事

八月十日

八月十日所宮宰相より大徳寺京師開及の
收出に甘教事部一在もくそふ之和國 行幸
終作もいふ多月下旬 所教輩に遊に所治
定は作もいふに甘教寺好より所寺所中

多しに自多月下旬より上京に後所迄有し
同日夕所宮宰相より大徳寺京師開及の
正意へたし所迄事所迄有し

夫秋所祝征に儀未具所機舎にそし
敵慮候に 所治に紙施行に相成候
全 里白に不被為に何し 所親征にそ
為有候所共之に方更に 仰下候に於
撫夫 敵慮に少ふ不被為替候
所寺誓所迄の終 仰出候事

八月十八日松平大膳受 慶祝所門所固

所免被作甘國家之人數一旦大佛ハ他某
候處考上方内七人日可人考會考し中
右人教毛利後得書之統古川監和經幹始
國傳ハ門去候右七人一月下考
八月十日所考宰相より所考お甘之有考
正康兵考人考し所考甘之考

松平下野守

今度和州勢州等 行考所延門
候ハ共外所用之考互候同急速上考有
候極 所考考事

八月十五日

八月廿七日所考所考所考甘二
廻考考

青木被考違 敵處候上様夫 所親
征し期未及利其候共何し 所親征
考互之考為 所祈願大和玉 行考考
考互 敵處考互 所親征様考今日
考不可被過考行考於大和國軍議
考互上考房遮之及言上様 敵處候候
考互易考考互 考互候候し所考候考

為在候言止卷 內修得共押之卷上難
測且幕備之役月半難有之修言及
紛祀修政九門所因之仰身候猶又於長
藩王士章壯烈之過候之跡幕備之案
之為之小難中言之為得止事課所因
之免候事之紀案之幕備之門退候言
之條中他言以下卷上之人同伴及他國候
候之畔 朝成甚如何之 里之候事

之條西中他言 李和
之條中他言 實美

東久世 少將 通禧

壬生修理之夫 基修

之條侍從 隆哥

錦小路右馬頭 賴德

澤 主水正 宣嘉

右之卷十八日不法進退有之被止官位候
事

同奉九月之條以爲氏之為修言家來夫所
極廣 幸賢之在府家光治年所居 へ方之直書之依
賴也

一筆中遠之秋冷候江空勝飲喜之至
抑以主師清意動之故誠以恐入以
多日夜痛懷之其作兼之動之志未達
獻用之遠之上事之候之何甘之候
事故多之正邪之辨相之奉安 宸襟
以於其廣盡力有之方賴合以方密
中遠方如斯也

唐秋金一

之梨堂

之條實美卿也

澤青川

澤宣嘉朝也

夫野梅庵後

右古梅庵より東へ渡りて戸出の処に梅あり
梅園あり之を以て東書久所の節書也 迎賢麻
田経常節 景道平川書教 龍改之入之に於后
州之南風進等

一筆書上付の書ももつたに處る様は
清安康平府にても成り重く清安ももつた
先月廿一日新梅ハもあつた清安書得るも清
安ハ清安府の節梅時節に清安府梅庵克
之為に恐懐之ももつた清安府清安府
之為に誠以之為に恐入之候也日夜清安痛懐不

はるばる越つた心も極まりなく新條兼光の勤王
志を達 敵明の道に上りては作
有し事あるを正邪に辨め之を事安
宸機は極る中を力しては言察し
達し御事永く新條之志を思ふべき
分得達 敵明候御意以上は同
之は公深き心で思惟し玉ふ事
御心にてあるは御意に
其後書付歟多様之御意諸君
氏下野書上を付ては中
一は少

言を達する事候 敵意は
退き迄進出良門候及様夫再復清平
初より下りては御意に
當年より力付候一様御意に
市情を察し以て思ひ新條公誠意
御意候

松平英信守内

初九日

夫野極庵 幸賢

三利堂様 侍史
澤春川様 侍史

九月廿六日所方國許如之十月十九日各系
既之國澄之御護久同安之御護美九月廿八日
各系降降之御久光十月之自各系之御
乃親系世近之御

二條右大臣所敬之御親族之御各系之御
各系降降之御久光十月之自各系之御
工信盛正實用人所村東之御祐允之御家女延士
久所一角一親之御侍坐降降之御加之御下
此方山城信盛之御近衛前圓白忠照之御出後
況又中川尹官之御山城松平之御慶永一橋

中納言各系松平肥後之御各保之御親系又之御
道遊覽式之御各系之御降降之御山城信盛之御
川宮近衛松平肥後之御一橋之御之御又之御
所方之御近衛松平肥後之御家老用人之御又之御
況又之御之御之御之御之御之御之御之御
松平肥後之御各系之御代降降之御前之御直極之御
七日入系之御之御之御之御之御之御之御
中家肥之御各系之御之御之御之御之御之御
之御

十二月廿六日山城之御二之御共矣上之御系之御

達より下知事等が来るに付徳川將軍奉勅
て上洛し候處改に共成り。白河關を先
に清國係の事より付之候に傳規より候
言ひより付京師の事情あり申入来る上洛者
は候方より候。當時在京に候徳川將軍
言ひより候。傳規より下知事等改に月廿三
日用人より所一角より歩より東下候。戸
諸家より台幕府へ申す。

之頃元年駿甲子正月十日徳川將軍入洛
日廿一日初。申す。日下知事等從事深。天款

日廿七日徳川將軍來。日下知事等諸大者
隨從奉深。天款徳川將軍。神武天皇御
清修補玉成切候。宸意より候。從一位宮下者
と旦。宸意深より作付。

宸翰寫

朕不肖之身ヲ以夙ニ天位ヲ踐ミ忝モ萬世
無缺之金甌ヲ受ケ恒ニ慕徳之。先皇ト
百姓トニ背ニ事ヲ恐ル就中嘉永六年以
來洋夷頻ニ猖獗東洋之國體殆ト云フハ
ラズ諸價沸騰シ生民塗炭ニ困ム天地鬼

神夫朕ヲ何トカ云ニ嗚呼是誰ノ過ソヤ夙夜
是ヲ思テ止ムコト能ハス嘗テ列卿武將ト是ヲ
議セシム如何セシ昇平二百有餘年成武ノ
外寇ヲ制壓スルニ足ラサルコトヲ若妄ニ膺
懲ノ典ヲ舉ニトセハ却テ國家不測ノ禍ニ
陷シコトヲ恐ル幕府斯然朕カ意ヲ擴充
シ十餘世ノ舊典ヲ改メ外ニハ諸大名ノ參
勤ヲ弛メ妻子ヲ國ニ歸シ各藩ニ武備充
實ノ令ヲ傳エ内ニハ諸役ノ冗負ヲ省キ入費
ヲ減大ニ砲艦ノ備ヲ設ク實ニ是朕カ幸

ノミ非ス宗廟生民ノ幸也且去春上洛ノ廢
典ヲ再興セシ事尤嘉賞スヘシ豈料ラニヤ
藤原實美等鄙野ノ匹夫ノ暴詭ヲ信用
シ宇内ノ形勢ヲ窺セス國家ノ危殆ヲ思ハス
朕カ命ヲ矯テ輕卒ニ據美ノ令ヲ布告シ
妄ニ討幕ノ師ヲ興サントシ長門宰相ノ暴
臣ノ如キ其主ヲ愚弄シ故ナキニ美船ヲ砲擊
シ幕使ヲ暗殺シ私ニ實美等ヲ本國ニ誘
引ス此ノ如キ狂暴ノ輩必罰セスニアルヘカ
ラズ然トイヘトモ皆是朕カ不徳ノ致ス處ニシ

テ實ニ悔慙ニ堪ス朕又思ヘラク我ノ所謂
艦ハ彼カ所謂砲艦ニ比スレハ未ダ慢夷ノ膽ヲ
吾ニ与ラス國威ヲ海外ニ顯スニ与ラス却テ洋
夷ノ輕侮ヲ受ン欲改ニ頻ニ顧フ入テ天下
ノ全カヲ以テ拱海ノ要津ニ備山陵ヲ安シ
奉リ下ハ生民ヲ保チ又列藩ノカヲ以テ各其
要港ニ備ヘ出テハ數艘ノ軍艦ヲ整ヘ無
餘ノ醜夷ヲ征討シ 先皇膺懲ノ典ヲ大ニ
セヨ夫去年ハ將軍久シク在京シ今春モ亦
上洛セリ諸大名モ亦東西ニ奔走シ或ハ妻子

ヲ其國ニ歸ラシム宜ナリ費用ノ武備ニ及ハサ
ル事今ヨリハ変レテ然ル可ラス勉テ太平
因循ノ雜費ヲ減省シカヲ因フシ心ヲ專ニシ
征討ノ備ヲ精銳ニシ武臣ノ職掌ヲ盡シ永
ク家名ヲ辱ル事勿レ嗚呼汝將軍及各國
ノ大小名皆朕カ赤子也今ノ天下ノ事朕ト共
ニ一新センコトヲ欲ス民財ヲ耗スコト無ク姑
息ノ者ヲ為スコト無ク膺懲ノ備ヲ嚴ニシ
祖先ノ家業ヲ盡セヨ若急情セハ特ニ朕カ
意ニ背クノミ非ス 皇神之靈ニ教クナリ

祖先之心ニ遠フ也天地鬼神モ亦汝等ヲ
何トカ云ニヤ

文久四年甲子春正月

二月十四日德川將軍より御請書上進有之
去月廿七日拝見被仰付候 宸翰之
獻旨ハ御即位以來 皇國之災禍ヲ患ミ
聖躬之御上ニ御及求被為在候 勅諭ニ
而誠以恐懼感泣之至奉存候情幕府
従前之過失ヲ自反仕修得ハ多罪之至奉
存候臣家茂不肖之身ヲ以修ニ重任ヲ辱シテ

紀綱不振内外之禍乱相踵頻年奉悩
宸襟候而已ナラス去春上洛之節攘夷之
勅ヲ奉スト雖モ其事實遂ニ難被行横
濱鎖港之談判スラモ々成功之期限モ難
量析極再 命ニ依テ上洛仕候上ハ極テ逆
鱗ニ觸レ嚴謹ヲ可相蒙ハ素ヨリ覺悟仕
候處意外之 宸賞ヲ奉蒙候而已ナラス
至仁之 恩諭ヲ以臣家茂并大小名ヲ赤子ノ
如ク 御親愛將東ヲ御勸誠被為在候
臣家茂一身之上ニ取リ海岳之 鴻恩實以

可奉報答様モ無之候自今以後萬事之
奮發ヲ改メ諸侯ト兄弟之思ヲ成シカヲ合
セ臣子ノ道ヲ盡勉テ太平因循之冗費ヲ
省キ武備ヲ嚴ミ内政ヲ整ヘ生民ヲ撫息
致シ攘海防禦ハ勿論諸國兵備ヲ充實
仕洋夷之輕侮ヲ絶テ砲艦ヲ嚴整シテ遂ニ
膺懲之大典ヲ興起イタシ御國威ヲ海外
ニ輝耀スヘキノ條件ヲ彌以勉勵仕テ恐
宸衷ヲ奉休憩度奉存候事、御座候事
併膺懲幸奉仕間敷トノ 獻慮之趣ハ

堅ク遵奉仕必勝之大策相立候様可仕奉
存候心横濱鎖港之儀ハ既ニ外國へ使節
差出候儀ニ御座候ヘ何分ニ成功仕度奉
存候得共夷情モ難測候ヘ沿海之武備ニ
於テ益以奮發勉勵仕武臣之職掌固守
仕大計大議ハ悉ク國是ヲ定メ 宸斷ヲ
奉仰 皇國之衰運ヲ挽回シテ外ハ慢夷
之膽ヲ吞内ハ生靈ヲ保テ奉安 獻慮上
「皇神之靈ニ報ヒ奉下ニ祖先之遺志ヲ
繼述仕度奉存候是臣家茂之至誠懇禱

御座候依之此段御請奉申上候臣家茂
誠恐誠懼頓首謹言

御請

臣家茂

右家範并請書之旨二月十七日諸大名へ廻達
有し

二月廿日下所書江色城等事為申水所相取
忠精了了之通相成等事他處へ廻達し

二十四日勅書書し旨叛橋浦銀港へ一案

御書振ふ分附三付一橋中の言御所聞
銀港へ海切等事共可貴事更以書取言
上し方は 聞台作札又以別紙に 仰お
盡力勉勵下有し 御沙汰候事

横濱銀港へ金精へ下逐成切見又諸公共
充實江洋去し御座候いふの趣達 廠
御座以上之趣聞へ守衛緊要に事ふ為事
揚海へ要港急務上者御座其切候相
人心安堵に候御座御座之旨相行奉

獻慮候様 市沙江候事

二月

去十甲為上 勅書書之内務廣瀬港一
条市清振不分明 里白中慶喜内
市沙江之義和仕候江廣瀬仕之込
己之外國へ使節者主候儀之付之万是
成何仕心得市沙江心再家 市
其謀之權大仕同海之政も要之就之江
以沿海之武備充實為様下仕も依
之以中上候以上

臣 家茂

二月廿一日傳奏加賀防城大納言俊明公以侍
下御方へ市國是之如并長州の如也見込之
建白書あり候國白殿之御方より達之目サ
方之建白書上進之

市國是之候并長州市所主振事都之
廣瀬早之建白仕之候之達事謹承之重
大之事件輕易之難申上之得共也市所不
意之候別市急之事柄之申察之方
之之越不避行誠以爲生根之目州之勤

王様より志より奮發仕候ニ以得られ
詭激論とある幕府より経業別。此
年来之舉動清威光にも拘り以て教を所
査問より抗拒に於ては昨付付可
所相多の論に及て兼り以て無言と勅考
付方今海客の人心未だ一定漸く此
を以て清和台水^魚夢に清親を遊ばす和
具の外是に接接に難斗の所を相社稷
清威光より一も成るに日州の及り諸
共沸騰仕成不逞に後庶民より煽搖

皇國の事論と相成可申とて原く焦思仕
候に於て其上頃日諸藩へ幕府より封書
より所^はけるに世州清和討に候に一統へ所
布仕忽日州へも書きたり付付二意に所
も書し直り清和討に候に詭激論に情態
清和書に於ては講に及りて厚強懷に激
に候へ書に與仕國に及りて必死に免
候に清和に仕特旨に及りて勅考仕
に物に及りて一色書に及りて門下と被る
登 新侍番仕候に及りて心清和祝詞

多事ノ秋を思ふに清國之秋ハ秋又
多事ノ秋ナリト申上ニテ言ハレタリ誠惶誠恐
頓首頓首

二月

松平ト野守慶賛

二月廿四日清國トシテ野守慶賛 月付ノ第一格
中納言始時裕トシテ慶賛

同日於 清國トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
ト書付トシテ同ニ日日月サセテトシテ建白書
トシテ

去月廿四日於 清國トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛

長藩末家并家老慶華トシテ慶賛トシテ慶賛
傳後トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
家老慶華トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
故清國トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
忽慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
家老慶華トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛
トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛トシテ慶賛

乃以澤おまへし何年より何れにても
代りては ちきり方にか成度いふともなる
所をいふ事ともなる事面よりいふ
書けし内一様なるは利を、いふ
りよるす方よりいふ

二月廿七

松平下野守慶賛

其来より建白上せし

世用清廣置に甘末家并古川監和家老
一人松平とていふ登り清江海とていふ
島地よりいふ登り候事十分悔愧に込

中何年入来り何れ度より其来清江
海にか成入来り候り然念に事ある上り
いふ成り候りいふなる事候りいふ
候り中何れ悔愧とて清江海とていふ
事とていふ候りいふ候り悔愧に
大に其来より十分悔愧とていふ
「何れにいふ候りいふ候り封書に
いふ候り候り 宮中より候り候り
見し候り候り候り候り候り候り
一事家初より登り清江海とていふ

と雖より清を主振清決す可也と事
有通事見世に甘し帝主家神清事
と以收電を奉清事見世に甘し
同浦事見世候事

三月

松平下野守慶賛

三月下野守幕府へて建白進呈之

三月以後清を主振等事見世り上候
由候と雖も要らざるを分清國粹と大
綱に拘りし候し事件見世り上候と雖も
見世り上候と雖も然止致すも多少計略等

を思入候し甘し事見世り上候と雖も

一は清上清と遊遊 今朝清事見世り上候

天皇之後清即位清事見世り上候

官氏と清一和一晚奉威戴以後に甘し事

載し清鴻業と建世事作し様有清

府有候事

一清新清向等し清進獻料清増進候

朝廷より清内清とる事と之に傳義仕候

と雖も歴世舊章清儀儀事見世り上候

人尤右一筆に甘し清事見世り上候

時勢を為さくは越えざる如く折柄は清
清振依りて全國人心を向背し抑う
る方こそ是れ清清の作上度事

一清所の善清の清の折柄は清の善清
の後慷慨は其の如く是れ清の修徳事
多かりは作上度事

一右の善清の清の折柄は清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清

一右の善清の清の折柄は清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清

一清上の清の清の折柄は清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清

一清上の清の清の折柄は清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清
の善清の折柄は清の善清の善清

度候事

一、橫濱鐵港清稅判權未定前免收別
以爲勢之便也上とも其の然る所況業
甚汚く、痛事といふも必しも何卒
汚れを免るゝ事なくは在極、其末汚税
と断然拒絶せざるに度候事

一、權吏之私。二、海防要害。三、勞心之苦。肝要
 のこと。少くとも只今も色諸藩主御儒寛
 りあるを以て返して國力及び敵聲を伸充す仕
 る所は甘華較しく下守清向一切幕府

へ清門清熱膏等移方之諸藩之臣、清
用、水原次郎清玉は仙井諸家月交代守
衛等より多し、所従清実傳より決断あり
朝廷へ清伺より成度あり

[illegible]

市改革は遊撃隊の港を確立し市を
兼ふるを度外にもなる

右市下町とて中郡とて同様に仕
役僭越し最盛偏に至るなり何れ市
海客の往來を促す所なり誠に

二月

松平と野守慶賀

卜所雪又ふ和志し 官武市和合し保ち
若し不及ぬ事共は仕事なり市留りて
中廣へ訖得し機曾とふは且同藩へ来り
終事し市とて謝罪候連侍親しく

皇國に抵達するまで悔惜の上 皇國一統に拒
絶する所候へ速に市服より中廣へ所役地
度より金言たり新書二月より傳書なる井
中候言 雅典と上世し

和儀は去秋傳書に在る事 朝恩宴加
少極難言仕人より名儀し市時時傳書
今市市傳書より市市向市市下口傳
言以所和と来る事州表へ夫體就來て
市市風切切と市市市市市市市市市
市市則 皇國に離散し甘市傳書なる

相見言定之。陳事等へ應接し清河に
下りて下見考は、弊事と云ふ。中州陳信で
海原相接し、要衝に甘藷を仕、欽海へ
沿等て、所定之、長らく所する、所定候
る。神州と清河の等、多成概、國力抑攘
之仕候事、いふ所、候事、有し、場合、玉
候る、中州表、多、神断、難事、以所、舊
來、清海場、候、甘平、事、華清、向、甘、布、
事、いふ、其、又、數、事、いふ、配、甘、方、
多、廣、し、欽海、所、華清、多、誠、以、心、配、仕、候、

日、地、多、濃、事、候、有し、所、多、水、和、仕、多、配、事、
候、下、所、いふ、水、事、以、其、病、事、いふ、上、事、以、神、断、
し、上、所、候、候、甘、諸、事、いふ、任、心、底、痛、心、下、事、
多、と、遠、境、事、候、事、仕、候、事、候、事、
先、少、候、事、下、事、いふ、池、下、事、多、事、
甘、事、多、事、以、又、中、州、へ、いふ、事、候、事、
と、前、文、と、通、事、候、事、
いふ、何、事、と、都合、し、候、事、
清、海、事、いふ、所、多、事、
と、水、事、多、事、

何財より上事仕るべき事は心未だ家業
多し先儀是六月江戸表参勤し順年故
門揚上事仕る旨立寄る候事付て門人
妾御下候事候へ仕る旨候事は何事候
へ是事分り候事下候事御親 貴事候
修上

三月

松平下野守慶賛

三月晦日傳書前より申中納言より聞役の事
に甘東御古作一紙を御覧候事御達書御度
有之

松平下野守

久々傳書前より 貴方より傳書前より
候事今在在あり候 敵意あり候事
事更船中州結集し候事切迫に事候事
候事海岸防衛多配に仕度且中將若鷲
衛より事候事御下候事御達書 國食
より事候事御下候 御達書之事

三月

四月朔日下野守二條侯白へ出候事
下野守より出候 御達書 敵意あり

市河院より遊びに甘藷林へ来 里に市河
より遊びに甘藷林へ来 里に市河
へ遊族の事故 敵を越えたる戸持の
より市河院より遊びに甘藷林へ来

美濃守へ

市懸物

狩野探幽筆
之封

市末廣

下野守へ

料紙市硯箱

市末廣

四月二日市河二條城へ登修家徳川將軍
同部より其押を對面より市河院より
市河院より其押を對面より市河院より
市河院より其押を對面より市河院より

市河院より其押を對面より市河院より

市河院より其押を對面より市河院より

市河院より其押を對面より市河院より
市河院より其押を對面より市河院より
市河院より其押を對面より市河院より

以右等之通商口岸見之、係ともなぬ人々業
をなす、此不圖より、領事館を以て、清国
商をも同市より、不遜とせし、清国へ、事
を述べ、

一横濱鎖港一件、情状未だ、停戦と勘考仕
る、開港以來、商波等、盛大に、進み、仕積
年、本意と違ひ、領事館、清港へ、係り、力
所、相解、は、ある、元、點、庸、清、情、上、清、容易に
、水、波、不、仕、修、判、乃、違ひ、不、定、に、後、に、清、港
、名、聞、多、色、に、相、成、多、く、清、成、四、五、年、來、も、な

此、清、六、年、前、事、とも、思、察、以、元、及、美
係、とも、即時、手、排、は、何、れ、清、市、より、清、港
港、期限、とも、ある、之、も、領、事、館、へ、不、満、に、お
成、今、此、か、た、人、に、情、を、信、義、を、お、立、清、成、成
も、輝、き、一、つ、とも、な、む、期限、の、内、も、權
を、以、て、ある、も、不、快、仕、領、事、館、則、ち、お、立
度、候、事

一右、通、期限、に、符、定、清、港、清、成、物、を、お、立、
と、清、港、の、清、成、物、最、も、多、く、積、り、清、成、大
艦、に、懸、門、に、情、を、お、立、清、成、の、清、成、物、を、

神州より順港より多岐順港に至る事
多岐多岐より作分度より多岐武備元
実より順港より一節より多岐平衛安
し禁同士軍奮勇より実備し順港
順港より多岐順港より一節より多岐
盡力より多岐順港より一節より多岐

一 攘夷より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐

多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐

一 凡國より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐
多岐順港より多岐順港より一節より多岐

以候外夫へ迄度清教達ニ相成爲修事

市ノ唐ノ時付ノ難ニ國事件ニ自急速清
決定ニ成度万一清達候事成ニ以テ不
清候事不引而後最清事勢ニ多ク
新清眼ニ付而迎日ニ事代爲定付、自
以候上ニ事候事付年清熟事ニ多ク
事多誠恐候事

正月

松平卜野守

正月之日依以達事 月事清 天候 天候
清裁被 仰付事ニ清事候、勤事等苦候

思召今度ノ暇ニ付賜以品候 殿事ニ趣候事
より清清清清五色清事廣一箱ノ仰事畢
る所ニ付中候之品印付通清達事

松平卜野守

清國然ニ長州へ立寄候事ニ付清事
可盡力若事承門ノ言ニ清事ニ漸ニ候
清事

同日幕府小納戸物清事清事入事ニ候
川度内客事ニ付事付事清事清事
以事之候事事事事事事事日教事

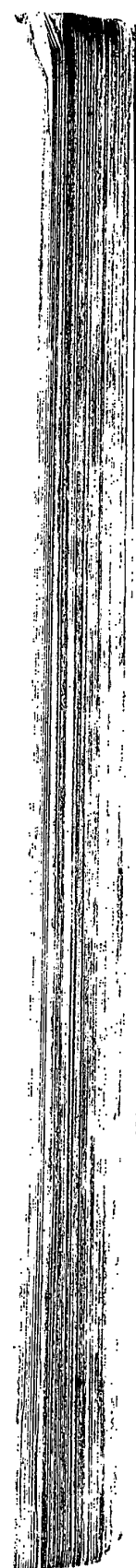
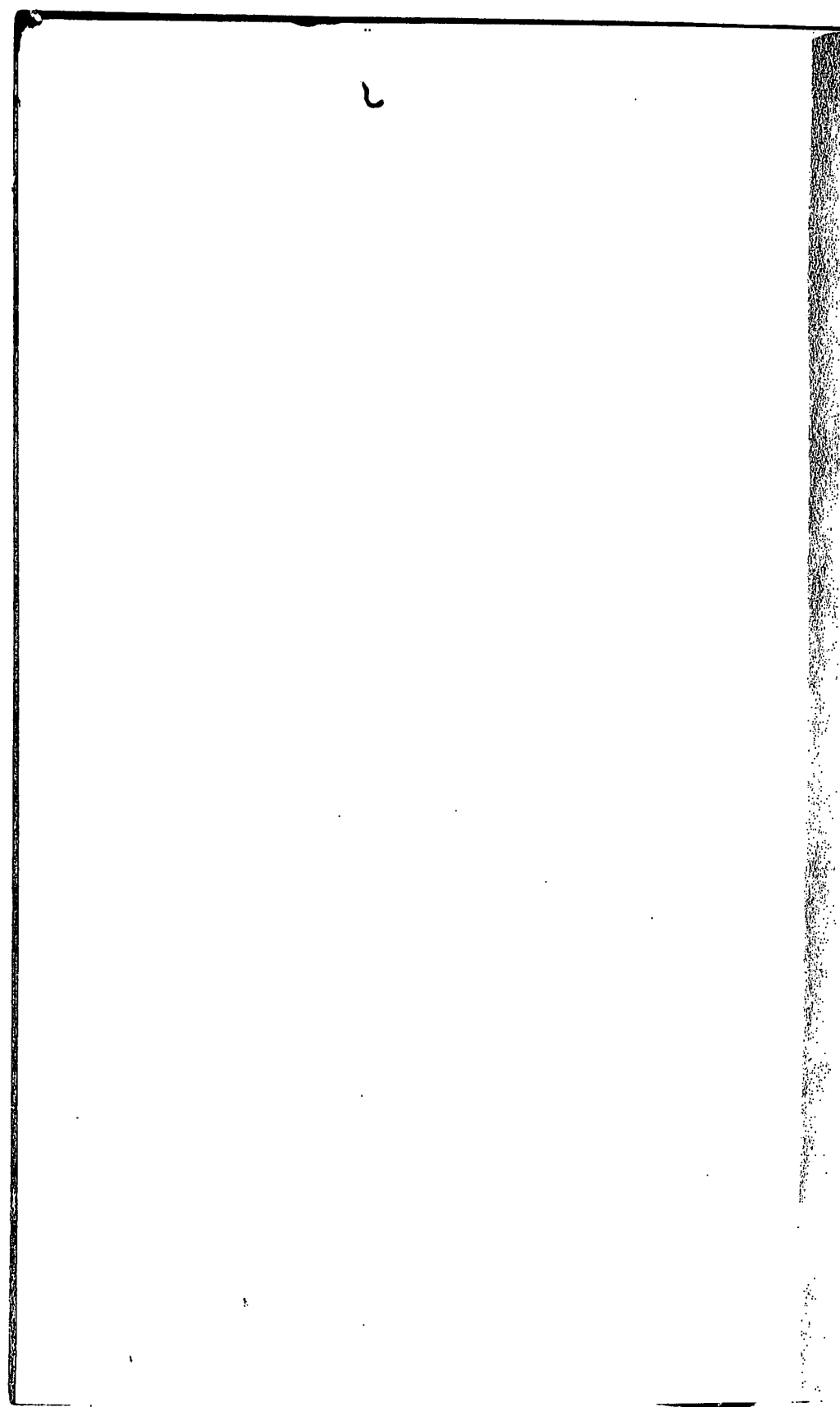
念ふに思ふに依るに麻林前より小待に算年
能代者一折居るに其に年切角就ひに
との邊乃廣原

同日乃建白書上進之

はまの歌よりいふ事。山より上より通せり
悔悟毎周縁のより州へまゐる力に
侍心ゆゑに其の就るに悔悟に徹し歌に羅
の奉謝する巨細に花咲けり同き花に
憐慜の心許免れし事と云ふに成を就に
東日唐の神符探案に云ふに徹し同海

今秋招別あるに其の事と云ふに
るに別廣の内國に世州に清に徹し
此の年夫れに戦争の事と云ふに
奉るに徹し徹し徹し徹し徹し徹し
偏るに徹し徹し徹し徹し徹し徹し
神州に清の一途に徹し徹し徹し徹し
懐心より起り徹し徹し徹し徹し徹し
し徹し徹し徹し徹し徹し徹し徹し
進み止るに徹し徹し徹し徹し徹し
に徹し徹し徹し徹し徹し徹し徹し

清以事一因心悔悟之狀し之に激痛之聲に
極み成旦夫如發來し同位切也之方しそ
上刺膚へ以封書し居るを世州に任成し内
之様を明し世國家に事をもたれし諸君に決
心仕悔悟する時をうけしを以て日廣く内
之と申す之を以て世州悔悟するを以て封
官氏多所候と痛心仕居り者也唯今之を
之に以て激し候はる同位に底以前に立度い
も水不仕と云ふを言ふも余り上と云ふに
伴誓し事あるに付はる以州通に候し之を以て
切に及候得れ之後にも國体より侍者等被執
之入周旋仕と云ふも激甚なりと云ふ事
少中悔悟し激し候し罪を奉謝し候し見
込相之業し唯今之を新し上と云ふも甚に恐入
り候る之方と候態時誓し之を以て以て清
を激し候し上りし中にも少中方も心仕候
之方し以て世州悔悟し候一日もよくお運ひ
なりと云ふに清も私に候るにたがひ之を以て
り之と云ふ激し罪をも謝し命に候し之を
以て之様を明し事をもたれし諸君に決
心仕悔悟する時をうけしを以て日廣く内

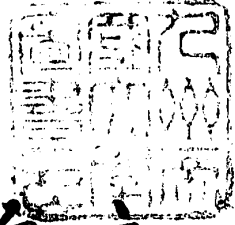
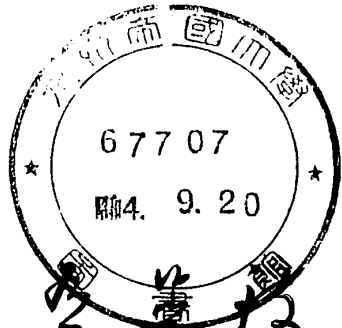


680
ノ
3

680
ノ
3

送迎解釋紀事卷之二

元祐元年六月廿五日屬家先福系就後之
台階人門卒呂休兄之為名門後日屬者
共夥要如國時一休兄離宮八樓天子以人
後此集之什就後之門戶長人款款曾之其就
書之字多人教押也自方自力而力也
及之流極奇如佛者如右出其人子先
中福系先佛者正邦家來之款款書者



朝廷へ上達し候おれ其旨趣は八月某
し時勢と慷慨し七卿復任と也門宰相
父子入京清免し候也叔多人殺兵器と携
へ所と氏集りし其の穂條中二日屬の家
光國司信康朝相並田右衛門介親施等共登
居て人殺おれ馬と就書りて去八月以後
清西並其之 敵慮に及しと申活に也國
司の亂に禁天龍寺に在席し並田の山所天
王の柵を撤去脱陣し要害と據りて也

清西五門締切し白りありし清中外共驚き
警固ありし一橋中納言等も七藩兵威に候
り遮り難しとて其初 朝廷新業不
成と懸念し其御前参附に任じ下被り長付
志意に備廣く出兵し候はり遂に七月廿四日
幕府より大小月廿五日に就後以て其難
し師ありしと家老一人相接候し門締切
候後清西ありし意に拘りて其へ是より清西下
申上りおれ其旨は後日申す候國司信康等

常甲入京中立賣津門前、追了、乃會
津人、教防、我、乃、以、爲、薩、人、就、來、以、應
援、也、兵、取、之、以、致、薩、藩、二、十、五、級、十
之、人、の、膚、を、得、了、以、時、平、藩、人、教、中、立、賣
津、門、警、備、仕、人、共、津、門、に、取、入、る、方、不、及、開
縣、又、仕、人、七、集、し、七、兵、に、押、登、る、者、有、板
大、坂、多、し、人、教、福、行、友、成、し、明、も、防、陣、大
王、山、七、集、し、軍、に、警、司、策、に、入、込、り、と、若、根、越
前、守、津、智、波、向、い、及、勢、平、都、に、州、幣、不

得、急、候、て、終、了、遊、走

之、治、元、年、甲、子、年、七、月、廿、日、於、幕、親、福、上、手、成、當
より、藩、邸、前、役、以、知、る、方、通、る、遊、走

松平美濃守

松平大膳、更、儀、幕、に、禁、入、京、を、信、長、福
主、越、後、之、名、に、教、就、に、就、し、其、其、更、津、所
國、司、信、濃、並、同、右、津、門、介、等、取、り、指、出、し、交
以、寛、大、仁、恕、報、報、之、更、に、其、悔、恨、を、言、言
より、有、爲、せ、し、者、亦、意、報、を、合、致、自、り

兵部之開き對 楚國爲死候其最
不輕加之又子善印之軍令條校國司
信使中全軍謀略代々所書押寄
速追討了る之事

七月廿一日

右通從 所新は仰出、自所追討
の速に軍勢國移へ、捕まふ圖
は、之れを、右從後、安動、
是より、輕入、謀滅、

但、寄る、攻、日、決、
中、可、違、候、事

右、通從、安動、所、新、
は、入、り、教、天氣、
清、中、光、加、
之、隊、七、
榮、然、
所、中、
右、月、成、二、隊、共、門、
区、様、中、甘、國、
様、

東に半 禁闕より下りて及敷絶る所何
次中より水舟を併ぎ事成る方可脱命
りとの事我々も悔恨甚なりといふ歎き
候り何れも一乃周旋とて下り出とて下り
て人山といふ所前田孫右衛門判官に出合
る大膽に大膽に難波面合より入るへに
見ると候事難波に下り入るへに名代
家老井原主計親章判官合より合はる
多事と違ふ事候る大膽に大膽に判官候

赤坂も附け上り藤原河内守空輔の國
旗より下り候事候れりといふ言へり事候り
て人々に贈り物あり

右へ通せ州へ使者を遣はせ二條園の齊
敬より候事藤原河内守空輔の國旗より
下り候事候れりといふ言へり事候り
て人々に贈り物あり
義理合より盡す所候り候事候れり
事候り候り候り候り候り候り候り候り

若悔悟之勸諭者一以之爲之振文於下觸
之時思諸廣之要之とて之受候に於て
之又悔悟之候も廣に達白に成り共探
用に當り万浦都に於合に候之を至る
是と周旋者し、候に不方なり又候此爲
周旋に拘り合ふに難感に因白なり
別難候に候、合に候使者に候、候に
成り候、諸世廣に候、一筆に候、始に
候、老共、國原共、家共、候、及、候

勤自己に合ふに候、池、電井、候、爲、候、
以、候、書、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
之、候、次、に、候、候、爲、候、爲、候、
之、候、爲、候、爲、候、爲、候、

一橋中納言内藏より、候、合、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、
爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、爲、候、

言い清澄なりと候也新様より行届とて清澄に力
を程迄度必要なりと若者より通ふ事行届とて
いふ都合とて成る候に於て中納言内意とて同
清澄様より後中納言より於暗合より極むに
なるへきとて教合より有し事故若見込に
立兼とて存念とていふに迄度盡力なる候に
いふ事とて候とて言ふなり

八月十三日於江戸老中御所侍前守 奉書
左に奉書相成候

一筆今啓達と松平大膳更進討ら仰出
に其方儀に海路より関より之よりより
より方よりより山より表へ往ふに大膳更進
より信儀可成る様仰出に松平大膳守に
より仰出に仰出に方よりより言ふ事依て守
候に其方共より候に其より仰出に方より
より候に其より中納言より攻入より刻々方
より候に別紙より通に仰出に方よりより
より言ふ事其方中納言より言ふ事其方

い儀、尾張大納言殿へ可なり伺ひ申候
下り達、各依りて候へば、恐く謹之

諏訪因幡守忠誠

阿部豊後守正保

牧野備前守忠恭

水野和泉守忠精

松平美濃守政

八月十二日

東朝江戸より通へば、意に合ふ所共、
況守、皇國內親、及候、係心痛、
夫所、相模、係、多、付、天下、也、属、之、
為、據、之、大、義、者、唱、改、之、係、之、
と、被、成、之、係、共、外、夫、下、持、據、
夫、所、僅、被、被、攻、之、係、之、日、被、
而、已、之、及、被、解、之、人、前、言、
い、旦、被、解、之、人、前、言、
と、被、解、之、人、前、言、
と、被、解、之、人、前、言、

夫所、相模、係、多、付、天下、也、属、之、
為、據、之、大、義、者、唱、改、之、係、之、
と、被、成、之、係、共、外、夫、下、持、據、
夫、所、僅、被、被、攻、之、係、之、日、被、
而、已、之、及、被、解、之、人、前、言、
い、旦、被、解、之、人、前、言、
と、被、解、之、人、前、言、
と、被、解、之、人、前、言、

勤く攻伐の半は彼者我代に流入し高嶺
容易に難討平兵連の禍結ひ士民塗炭、
若くは修而外夫は皆言に可停る所也
月形洗花様「即令も主權失し言に有志
士は口を不保人共今し形勢よし」虚言に
成るゝ拙者も候「天下は漢人藩にして多き
阮意あり」藩主は外に其れは去年 國下
として藩戦争の門は七藩より藩主が沈
みしに仇敵と成り候「他藩より多き權

事候はふと下し候はふと上り候はふと急務に
二藩和議を周旋し「其れも權にこそ相立
と候はふと家老と申出ふと其れは多き
所はと捨たてはは長藩所候として其れは
初めは威度志をいふと先高藩家老所
相換大音因幡^{重勝}又 等其れは水吹仕候と
藩に候はふと不遜嫌疑に多きと盡力か
其れは洗花盡力いふと候はふと
是より月形様の藩主和議せし人王室振

具の形を以ての役を主として問ふは未だなく
此の如くして親友の能く義門にすむ日あるを
藩に付くは天下の正義伸ひするの形なり
よき男一人の如く洋の言を用ゐれは居るを
只對する藩の封代肥前田代を以て一とせしむる
平田大の如く志操ある人と問ふはあり
存して今勤王の大藩を藩せのとなすは天下
あるが如く未だける藩と親せしめす
は至る一新天下と親せしめすは未だける藩

とせし藩の親戚なり故に天下力を以てし藩
藩と親せしめし人等藩を以てするものとせしめ
んとせしに而して藩と今世に因る
一天下と親せしめしは未だける志伸ひける
の如くし七人の如く志伸ひける友爵と
尊とせしに而して他は今世に親せし
めんとするは未だける其效と奉る
うすし親友なりと今世に親せし
と協力せしめしは未だける一分の如くし

こゝろを待て袖心よりて致さぬ拒まざる
へし世に苦むれば待て苦むるを悔ひて
あらずも腐じ和ぬる力をさへせん我れ
も世に腐ぬの好むを協力するらん其
也殊る待て我れ腐の親族なり周旋の力を
そとへしは和親をなさむとまうさるひこれ
而勝回を一家よりして致さるべき

同八月高装志きる人ありて常と夜合を
ひき合中し國下國師のよりし候し候か

「待回せし久あま」人例上郁き市祐廣し
いづれし今「林田勘七郎」と名をす我れ
きし如く形を奪へて諸を來さるや常市
長和ぬ乃れを述へて國をへしき「お伴
いて平田と稱ひ待て和ぬるを稱せしに
而勝回をすし候も中人林田國の暴舉
ありしを常市待人」と和ぬる却けは休を主
とせんといふ常も亦て好機をえし稱せし
も例上其候とわけし

と副少へして主米尚行と測上祐康と
種火と因行せとの序行より日と等して門
の通けと詳常市平に師略を宰府の松
金経清名は知江氏に重主と家と宿と一と大村
藩の志士株平勘四郎正安論正後名乾和
武勝江清と邂逅志略得せし中一と長
和親と因縁するこころひ一二二人因縁
し是より平田氏と訪ひあはれりともけんと
別をとり

叔種火と叔とむる毛利氏廣封と獨りて
種火主君の言と通へるも藩務年々王
しと志保をとも諸藩とをとも大義とを
と天下とせしめられしと家と中輩穀
と下とと黒幕ありし其主を容ゆる所と
と痛やし程事家と此と史書とを天下と
藩と市とをたつと徹と徹盡力付しと得る
家と主と一侯と密使と此と史書とを藩と
時藩藩とつ政場とをたつと史書とを

述し其後直固甘乃美儀の如くして受降者
様清執政清志と西に清配意と候大膳
父も別々難有らぬ 今國にも為に後藤和
解は長傳より依頼仕付れ、自前より未だ其
迄は使節を以て可成裁との儀は清志書好
受仕り申す。結末不承整るべく述べたる不自心
使方より言ふ日所門辨序途に鑑き
波瀾美人多縁ありけりやうえけり藩之
より漢香一宗存兼 筑上衛義門中吉川院
花正綱平川忠教勇為侍新々秘の奉行
遣修の中合の上木四人と兵部卿と京都
を都口迄一々門迄一々武蔵の二ヶ月
下へ使者能言式給直接せしむる漢香
キヨノ藩今日の形勢よりいかに受降者
於ても大なる痛心事といふは侍少く暴威と
とせしむる相減の多縁を解散しその内
より逮捕せしむるなり而今の形より
若者のよくなるべし此を以て藩政を急角

しき候に付てもね来天下の大督に
一一定するや測難い事も非常の事あり
さへいふ候にても同くともいふ候の
うへに斟酌して隊兵に非常の定着と
能くいふ内人村あるべし軍用より
兵隊に政府が難き事も属中一和もい
く市井の事にもなる一和隊より天
下の事にもいふ言と保つていふ
さへいふ自ある一和隊のいふに

必激せんといふ難く一和隊の
あり教へふんも思ふて其後へ寄て
以依れぬといふに其火を兵隊より
中へく其隊に和ぬといふに其
ありといふに其隊に和ぬといふに
いふに其隊に和ぬといふに其
我軍に命を告ぐといふに其
其隊の兵隊に和ぬに激昂するといふ
ありいふに其隊に和ぬに激昂するといふ

とて様のふりなり只主人又も恭祝して寺
院も觀念のち持法受あつて天壽へ
乃周旋をれじとの言へり我藩の多難を
世藩の恭祝を仰へり今一層暇を
く諸侯と一和して藩を祝賀し
天下の心を保つてとて天壽の言
をえりとの言なりは然る言の如く
して立て候ふへりて且つ
との言乃天壽の言を仰へり

藩とて通へり白浪諸の藩の周旋を仰
へりて四人の心にて然る言の如く
とて候ふは候の言にて然る言の如く
粗忽なり何事をも介せり
何も泥れ中へりて然る言の如く
且然る言の如く然る言の如く
も巨魁の刑罰にあり恭祝を
一変せり若しよりて然る言の如く
て城を枕する外なり何れも然る言の如く

とて様のふりなり只主人父も恭祝して寺
院も概ねのち持事受あつてとて天壽へ
乃周旋を教じしものきつて我藩の多難を
七層の恭祝を地へくけり今一層暇を有
く諸侯と一和して藩を祝賀しとせし
天下の心を保つてとすもさきく天壽の意
をもそのまゝあらうは然るも昔の如く
して立し様に入つてとせしとて其の如く
とて乃天壽の法を四人へ傳へるをい

藩とて通へる向後諸の藩の周旋を所
とてつて四人の如くして然るも藩の始末
とてつて其の如くして然るも藩の始末
粗忽なり何卒もきつてせしめんと
所も泥れ中々も教へるを附し
且聲藩もは林の如く下りて然るも
きつて巨魁の刑罰にあらはれしとて
一変せり若は上りて然るもあらはれし
て城を枕する外なり何れも内務にき

吾輩は存漢賊を以て長髪を信する人なり
 依て清國に依りて為るなりなり
 月西

けは去所大音二抄改より月取洗飛祥とせ
 州国旋と密使地来すと他の疑ひもあれ
 まくとも抄中ひとたのひありと其方とあ
 任せしむるは同系と保つとをわすへしと命じ
 られ同系の寸略ある者と同者と稱し其病
 と推察せしむるは荒上より密林伊丹と

昭

[illegible]

修養一且家富して実財の言なく 主上
の御遇を蒙りていひくは愛しくも御席
のありてはわづ諸藩力を併せけし御意を
後継せしと輔相とあるはも實のなるべし
と候しは詳を始り折奉る條氏より夫所柄
常に依れりありしは人傳とありて被書せん
とて同系書りありしは條と稱して敬
し

十一月十九日 邦君より頼崎の別業より大

崎と愛をせしは建初月形より小接待せ
しは諸藩より先日建初君よりふれとす
る感念しは其侍中西より杖を疆限
後虎前根輩に座との後併に執事を指
せりといひしはも藩と書信と指すを
とて昔より大崎殿より僕にめをさる
んとしひきき君に共し御るべき人なり月形
建初は諸君より懇問す向後共々天下の
より安んじしとて厚杯を献酬せり

二月初旬長州寺丘隊長高杉晋作其同
危難と避け中村玄之と會して東奔し
月形祥之助を多し、同志を謀りて所村如
作定省、祖母宮東元浦野氏の平尾村の山
莊に潜匿せし、休台、吉高、吉和と附けて懇
待し、一日中、中の流地、其風音和し
き、戯画と装束して思案せし、今更
に藩之者、四索謀殺刑をなせし、其隊を
散れし、その報知書達しける、か其風見

し、忽落後、戦行し、悲憤満面、敢て其
毒人の面を斬り、軍隊兵と集りて、情を
と侮罵して、死者の仇を報せん、いひて、
東洗死す、かくなり、され、潜居す、其時
より、所村として、同志を謀り、思ふ、す、い、
き、其日の思ふ、戦し、刑を、告げ、され、洗
死、秘中の書籍と典物と、金を、獲り、
所村の妻、其の料に、贈り、ける、其、所村
未、其、所村、子、川、書、教、派、白、三、書、清、と、名、を、
い、ふ、

森安平 信廣 弘宣 信伊丹 奥一 市女 氏
八市 勝從と市府へ参上ししと十二月廿一日
晋作と同乃として吉野村を名の侍りて其教
の宅に参りしに其時女病にて是をけき
家着書教の所行を止めしとて歎きし
し所が家を出るに多形感歎して其日縁兵
を憎きといふ川に代藩の急を救ふとい
ふも歎きしとて海をわたりて言をせし
妻よりこそ相をせしといふや弘宣は森安平

市府より参りしとて藩の正儀を弊藩の懸念する
如くは萩政藩の儀々と抑制し諸派の暴發
を懐疑せしといふ係り付と弊藩因縁
すべしとの藩意を述べては家老の好肉を
市周長 彦接衆なるものにて止るに藩主の
婦より市府に之故自害をいふといふ人
分は弘宣の参情を附し相依頼する言
と述べて贈物せしといふ川に同サセる若
くは其家老市川 結城 一 西

能くす故に政府隊兵は一和せしむる
の爲にさういふに難くと辨へられしに
川中にもさういふに内証と解くべき
なり他隊の周旋も効をあらへしと目
撃常とみて悔すべしとて言ふが
らまゝ隊士の後例を思ふとさういふ
しに能くは任儀とてさういふに
五月村に於て我輩も又兵力を以て抗
對するもさういふに要成さるべしと

辭しきとて馬関よりさういふに隊
士の爲に正義の背を以て他隊に移す
ことゝまゝに肯んせざるも若し兵力を以て
奪はんことを我輩も又兵力を以て抗對す
べしと奮激しけしに五月村に解してさ
正義の背を毛利侯よりさういふに朝廷
よりさういふに補佐せしむるに正義の
背なり長州の私利よりさういふに
さういふに貴族の俗論よりさういふに

諸侯之使臣をもて吸へ諸兵いかにと擁と
之を對抗せんとするを余は固く是怪し
毛利侯又その從來も主の正義を天下皆
知りたれども今信卿臺に擁せしむるを
して正義の諸君と対せんといふは其志を
諸士に知らず其の志を其の正義の貴ぶ
る邦君と信卿臺と事件として顧みざる
れ轉移を拒む何のゆゑや余は固く考へ
て諸君と内証の恢復をこそせよとす

おそれをわくを孤獨として大衆の心を
抗すると言ふは余の心を以てしやと痛
破すといふは余の一行もその後を
はききして人畜畜とて居て聞かぬとて代
りて悔しけしといふ川に前後を擁して
はむせうけしは曉ふりて皆門をうら
海の中に依りて石川海に依りて
実名中宗侯を主道
に又きき要するを
も移す諸侯方とては信卿ありと川
に感懐しと胸襟を拓きて能く其用

いふは出家の爲に力と欲とを力とて
て和解と保つてゐる者なり常と前更
人の世用周旋するに他の嫌疑と避く月形
洗物と事任しこれより日地より人より
存るも也同人と又視るもさういふ出家と
夢より言日久之し率直にして其いふは
喉嚨と歩くもの傾慕し致し次日西へ
諸藩力と保せし條より還る漫談と
補助しるも權の偉勲乃ちさういふと保

るへしの論、同者、いふと抛り力とてすの
未ありと者、月形、東福の代とるなり都
祝も上月、入る西海なり諸藩証せし爲也
出兵筑前豊前、其時中防步入し命は右
より大津守家来る爲る也、惟寅 森勲作通
いふ是と述、或要受し命と國中、其時久
尚采伴膳と節と方常と節、水質長昭と
多清、諸藩田畑半之と、解兵し祝し入る
何とて、其時、信濃より、まゝ、諸藩、平藩門

然り少君と云ふ同藩人其地ニ
尚或一布、一帛候と云候長喜入極津之者
侯様より來て月形洗我等より會中防備
全國一和之候下を力とす

上月十一日征長副將松平越前守茂昭少君
候より下中より自筆書據より征討諸侯
様より越前守島より士中少人運
用より福屋將出より少君より少君より
此より少君より及教より

以行より

何事候哉と問へば大音周幡解兵に候説
ゆき候也と答へて大音等て是より討入
見合等より何より何れ解兵に候幕府より
之より何より何れ解兵に候幕府より
衣衣解兵に候直より何れ解兵に候幕府より
天子に禍乱也と稱解兵に候より何れ解兵に候幕府より
へ而會解兵に候家元大音周幡林丹後
直容より何れ解兵に候幕府より

征長に候増尾張前大納言慶勝先より

廿二日於大坂城副將松平越前守信俊
者居於幕軍後方之三月十一日諸軍持
刀へて大坂城十八日より可成勢決定し後十一
月廿二日大坂城を占領し廣く之を傳へて美
濃等諸郡に相伝へし事なり
書進呈し

此節毛利大膳所進討を借廣へ討
し仰付廿八日より攻懸し後所軍令
に應じ要の地を今度所進討より仰付

後より大膳父子等共衆を休しし所長由
國に人民不接所休戦しし事なり
中より攻めし所より大膳父子初に衆科
有る半所法取し後より之を水取不仕し
る事あり所進討より之を配り進め方共
あり所長由の地を今より仰付し討懸り
成るに被正議し事なり所衆賊に
防長し士民一同必死し事なり所長由
所進討より之を配り進め方共あり

存心者又其虛心者一外夫又其心之混雜
等者發之復之存心者一其心之混雜
解智則其狀之術中一臨了 神州
亦人爭以時之多寡相稱亦下如此深見
作審問者一其心之混雜一其故之様子
相探之也一復之亦人而兼其心之深見
一解探索其心之深見一其深見之様子
仕者以監其心之深見一其深見之様子
若一其心之混雜一其故之様子一其深見之様子

進討之諸軍一對一解之敵對一其深見
一精之相之深見一其深見之様子
猶如時之換板機一探索一其深見之様子
其心之混雜一其故之様子一其深見之様子
其心之混雜一其故之様子一其深見之様子
其心之混雜一其故之様子一其深見之様子
其心之混雜一其故之様子一其深見之様子
其心之混雜一其故之様子一其深見之様子

忍入之共 空國之清なるも故方不肖
自身が不祥多諱思ふに此より誠惶
敬白

十一月

松平美濃守

右存命書方如へ共書中より難く解候
ものなり加て日書十一月十日國作方主廣
鴻前より日書從贈へ拜獨り供与又
未熟歩細毎解く事なり近頃と雖も
寒冷なり候なりは常健候なりと云々

此より日書細書より下り見渡すに昨長防
津退討一果より儘く心より返す一むし
次々玉物より情に候なり何年にも懇請に
候なり候なり候なりと云々力能候方なり
心掛より情に候なり巨細に探索より上
に候なり候なり候なりと云々出候なり
に候なり候なり候なりと云々云々
所より標的なりと云々外より日書正
大より候なり候なり候なりと云々

猶け上りたるに候。其節に於ては、
何應に於て教ふべき程に思ひ置
きし。此の如く候。其節に於ては、
謝るべき程に思ひ置。其節に於ては、
早更に思ひ置。

ナリナリ

二白分。此の如く候。其節に於ては、
其の如く候。其節に於ては、

大他言

大他言

二月十八日尾張家付者。少室へお越。大他言
家。東所。古作。一。此の如く候。其節に於ては、
其の如く候。其節に於ては、

毛利大膳。父子。事。休。罷。之。其節に於ては、
其の如く候。其節に於ては、

尾張前大納言

毛利大膳。父子。事。休。罷。之。其節に於ては、
其の如く候。其節に於ては、

書翰以密使に付

向來に及ぶ所を念ひ清業に成る事
欲せしむるに及ぶに密使に付
多野地候より病褥に在居人たる押
取而會つてとてお取付に誠心以て
仰ぐ玉ふにも多謝の畢竟之を先所
幸にあはれと申すに封 天朝帝府深
も恐入の候に及ぶる苦心に候へ
まゐり候に及ぶるに及ぶる苦心に候へ

の救授に及ぶるに及ぶる苦心に候へ
來り候に及ぶるに及ぶる苦心に候へ
一統の周旋に及ぶるに及ぶる苦心に候へ
獲野要に及ぶるに及ぶる苦心に候へ

十二月十五日

廣封
敬親

美濃守様
下野守様

桐下

二陳委細の侵へ申入る方より取てらる候
猶賤介へ申合ふ方深瑞に何れより
所て示す存以上

松 美濃守様 毛 大膳
松 下野守様 毛 長門

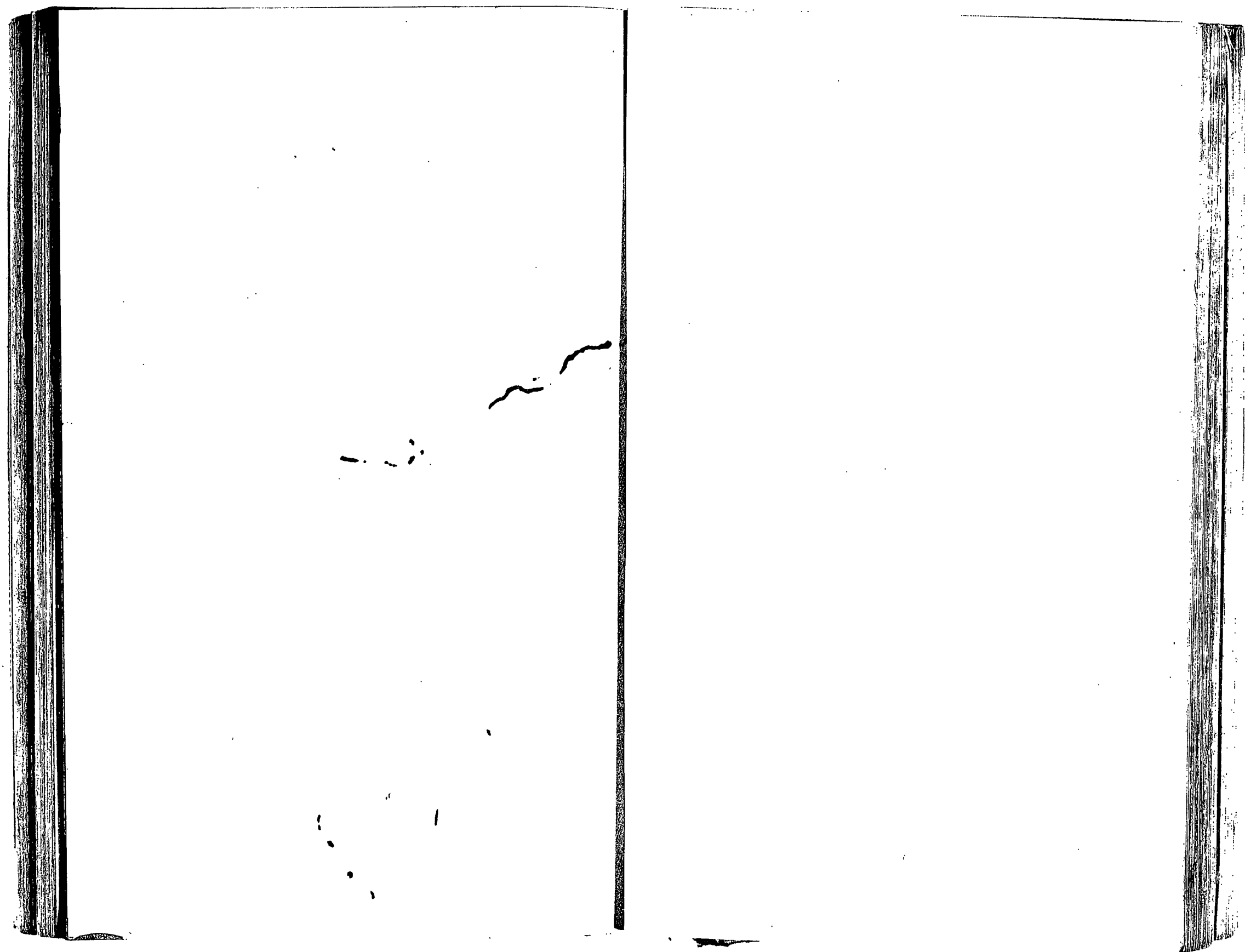
市直披

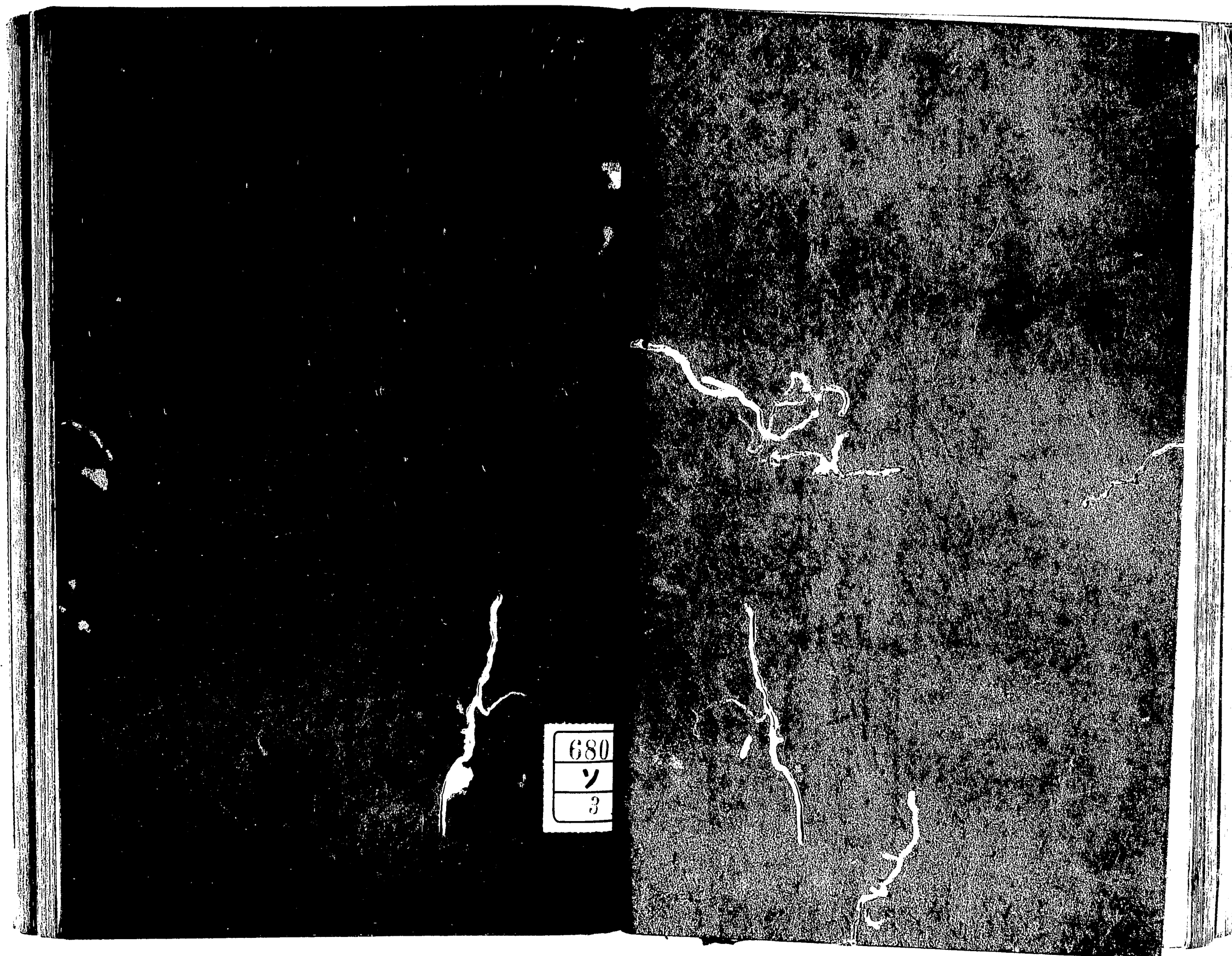
十月十九日尾江信物榮植 為之廣為信賴
營として防長二國の間者へ入候と探聴仕置
宛主と廣くまゐりては謹懐仕中ニ付る玉

是に速に寛典に示す事ありて度より述
信曾廣為本陣到着以前大膳より於系
初暴當り家光福永越後並田右衛門介國
司信濃一切懐中甘茶保る者なり衆三行告
志道安房親友より老長より高級廣為へ
為家又吉川監物廣為より大膳父子通
来方より信物より新城明退萩、門を
城内に入寺院、親友謹懐罷重、謝罪
と述す家光於 禁下強動に始末又子

平家之信也羅科難道信之執事何如之清
河持身待自判之證書并國自信信入軍令
狀中後之信入之證之書并信入之書家
毛利左京元周流諸廣篤 信及元純より入
之信自判之證書并信入之書并信入之書
信入人正正肥より信入之信同信入之信
却寄南之信入之信入之信入之信入之信
實換之上慶信入之信入之信入之信入之信
附

去年長州下向之信入之信入之信入之信入之信
信入之信入之信入之信入之信入之信入之信
信入之信入之信入之信入之信入之信入之信
信入之信入之信入之信入之信入之信入之信

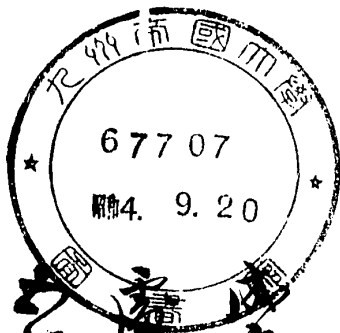




680
7
3

680
7
3

送迎解釋紀事卷之三



二月弊藩在る因勇平 元道後大坂に在る藩
藩方所行を市 後五六ある所所並に事
了官同行すは一件中村到 松浦格はるり也
此也勇平藩に在る然れども藩之在るは
藩に在るが如く尾張家へ在る藩に在る
可し切重解解り勇平に在るは

以自力に事なすに述る水門有るを
二處にあり

松平美濃守

去年脱走し、是を長州へ滞在し
之條實美初より、半長州より請取
人宛に自分兼細川越中守有馬中務大
輔松平修理亮松平肥前守へ預置若
く方主と稱せし上門後、其事より斗
尤積取方難行ゆゑ、越中守初より兵

力より速に隙機を所、並可有るに、
越中守初より所を事

松平美濃守

今度之條實美初より、半他國へ門
移方格別、斗より斗脱藩し、其共長州
より受、斗方等より、都て便り、處並可
なりし事

元治元年十月 表印

十一月廿日對島藩老松平田太右衛門用人

士死之實痛不可堪事之成否未定至
候より守様御指揮より長府旦若
國より盡力あり二州無別室此上御義
士死之免し以後尚又御賢恵に候
希は弊藩微力より候より候より
少く拜肩御心候より色猶も吉報と
りて皇國に御大事忠念に候より微志
祈願案下より候より猶月形洗義友へ
轉付より室より候より候より

十一月廿一日

平田大江

一 畠田播磨様

一 矢野相模様

一 大青因幡様

係附より隔田文より重和より書より

今度長州御征伐より美濃守人数願
希松より御心馬算へ押渡より言より
御心より十八日以前より城下表より
御心より御心より御心より御心より

其外より方々より物より以て百欠儀多し
海より出れば其はむ後海新し故に海上風
浪あり一日より多し其後其多し其多し其多し
被室布衣の着た表へ多し其多し其多し其多し
此より人数より物より人より便利順
端と探りて多し其多し其多し其多し其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し

松平大徳守内

二月

隅田文之丞

小柳受取了りて元浪家よりし書福多し其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し
大膳父子一日に森城に在り隊兵五千人推立り
其長府より関を以て此集りて外に追討し其
藩防戦国を信吏拂去る其多し其多し其多し其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し
以死力五千人守衛多し大膳父子より其多し
其多し其多し其多し其多し其多し其多し其多し

入去水組の万々事勢に於て廣く為念に
從増より後新城破るに於ては
川原より兵を發するに解兵を備え攻守復
以る年終るに付ては諸兵に寒氣の痛に長陣
被るゝ必之指乳を至るに所請の一
件に答ふに大 皇國に於ては及限盡力
て以て決定に十一月の傳書如左に命じ
其紙に廣く傳書あり
尾張屋の所傳者廣くして及限盡力に於て

以て家來へて通る事

毛利大膳係に謝罪に連て其紙に此
上て市所を以て其處に於て其紙に
其書に其の國論事對方に其書に
月六日と廣く表へて早速に其書に
但本文見込に其書に其書に其書に
其書に其書に其書に其書に其書に
早速に其書に其書に其書に其書に

使者傳候に候

今乃長所^レ以^レ征討^レ前大納之極廣^レ爲^レ
 出陣^レ遊^レ之^レ所^レ者^レ利^レ前大膳父之極^レ
 之^レ所^レ者^レ利^レ前大膳父之極^レ
 川^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ
 表^レ門^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ
 中^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ
 新^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ
 以^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ
 初^レ爲^レ利^レ前大膳父之極^レ

之如石版成敗年人正極上流之計美問
 有し是台之新築を毀る後より甘み癖
 ありたり師由あるは運ひて成りなり
 少くも早清處に多く端に漸く運
 むけ後、國東を所裁断分傳う此下一道路
 跡を情実達兼へ候も難升若寛裕其
 定より大いして計為りて成りなり
 兵士と常の年限速に所祈に在りて諸藩
 と人救病弊と程の事計配より遊所不

立派列藩に於て其に國家し御為とて
赤心とる金に御て之料酌光侯へり
是れとて侍共より多く入るるを御
むと上より御評熟なる遊御者度権乎と
有るは之國東へ御同く是れとて國東
より其を御偏りする御評熟なる人
也有る金より御断絶とて御評熟
は之れとて御評熟なる御評熟なる
更之れとて御評熟なる御評熟なる
御評熟なる御評熟なる御評熟なる

しつた金より御評熟なる御評熟なる
し金より御評熟なる御評熟なる御評熟なる
御評熟なる御評熟なる御評熟なる

二月

御評熟なる御評熟なる御評熟なる

毛利大信侯追て御評熟なる御評熟なる御評熟なる
し御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる
は之れとて御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる
し御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる御評熟なる

傳へる事ある人共其意を伝へて其の
以上指別所定典てい處を定むる事
國所を所ともない別界を別紙書
よとて通書事より上へい片極く極
す恐縮しむる人共をくしりし事
と極り上候ふ事ある事なり事件
伝所極くしむる事捨て極く極
考へる事ある事極く極く極
と多公恐惶謹言

三月

松平美濃守

一毛利大膳押隠存し作付毛利共門候廣
場より作付度事

一浮浪者共お師向へ候へば其州へ所任
せし事

一長所無所則家精へ向へし御同席
作付度候事

三月廿日加波司書へある事書り候へ

廣海より新日大徳寺に書も尾張侯へ進呈
之

尊厳拜見仕候如貴命寒冷に御座れ
ば御常使御在座被成候事御座る
先頃ハ長崎御進付一案御思存申上
程能く御座下吉門等初より御上
候も有し御煩ハ莫意御願以上ハ公武に
清為之標的ニ成候旨西人高明に御座
り候し御座同族等御座るも猶以上御座

御心付候ハ何應より上り候事御細に御下
奉感佩に且又ハ此の家来加賀目書も御座
り候事多端に御座る事御座るに
情に御座之條美初詣取之一條事御座
候し御座之盡力仕候御教諭に御座
り候し御座是より出御義仕候深念に御座
共座御座る事御座る同族等御座候誠心不
容易事御座候に御座 皇國に御座候
御座候疑乃御座る力仕候に御座候に

此は法度し兵士迷ひの解收ニカ成す所ハ
番兵并小々宛有る事案を主ハ武官宛
仁し法典ノ刑より止る後偏も執る方執る
主名ニ憑き事知る程少へき事多し同族に
依居合ふ所より方々承知し上々実の一刻
に門外よりいふ力何方も解解と成て
尸後日何より神門任渡し追ひ立てられ
泣懸念仕る事ある地なる面談ある所
へ方々事案より取替る事案速に運

此後事案の希い事なる事案要用と判
断す

二月廿六 夜ノ中

野村ニ
これ

二仲沙白き事案ありつた事案送る夜
は時肥後藩に和解送る事案送る事案
ある事案一は事案一は事案一は事案
自ら事案に任る事案

二條西ニ條事案より事案送る事案

夷使官多逃事細演候し筑前へ轉移候
と述ふ所即若くは候へども身共浮沈は
毛利家と因縁しとる。是より先使共
以て布衣入る上は決断し候ふ所
必情むく候ふ迄。昔より候ふ旅宿より
此府家先桂傳候事より人々衆亮より
万倍倍候ふと述ふ。日夜すう候。吾作所村
和作請大田市に逃瀬方後縣始す人々入来候
事候ふ。此所より始榮藩へ候ふ。此報は

しりあ藩賊と曰ふ。且諸軍に圍み解せ
る。謀計あると云ふ。疑惑候。論。又金
し。朝敵と稱せ。是毒は瘴氣に。傳
し。執事せ。政。此所より推立。候。順傳
へ。此所より今も藩より移り。是。昔。難
し。候。此。者。也。情。実。推。立。候。し。と。述
ふ。此。所。より。一。瞬。中。に。日。出。候。事。あり。と。云
ふ。此。所。より。人々。入。来。候。事。接。し。先。方。人々
の。一。件。より。止。り。候。事。新。傳。に。及。び。て。辭

とてしる翌日、廣河川城への道に、米廣河本
菊江幸江二人、旅亭より、金等も廣河本見
候へ、途中、一、飯取、所、飯を力する、さる者、
主、清水所、丹後と、和合、合、内、途中、
大、清水所、せ、さ、心、所、也、途中、一、さ、さ、
き、一、用、を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
制止、難、き、さ、さ、さ、一、故、一、常、年、一、さ、さ、さ、
清水、一、さ、さ、さ、一、情、態、難、知、さ、さ、さ、
小、兵、さ、さ、さ、一、さ、さ、さ、一、情、態、難、知、さ、さ、さ、

一、在、め、し、か、及、司、書、共、一、信、情、陣、中、入、了、側、用、人
小、瀬、新、を、都、一、達、一、い、み、所、一、心、さ、一、情、態、難、知、
一、述、一、翌、日、司、書、共、一、成、瀬、集、人、一、さ、一、謂、一、せ、
一、情、態、難、知、一、其、後、本、書、一、さ、一、れ、秘、表、さ、
一、さ、一、い、海、一、さ、一、れ、秘、表、さ、

一、さ、一、人、一、さ、一、未、以、難、知、一、情、態、難、知、一、さ、一、
一、情、態、難、知、一、月、形、洗、花、一、途中、一、和、合、一、さ、一、
一、情、態、難、知、一、上、の、所、轉、花、一、さ、一、れ、秘、表、さ、
一、さ、一、い、方、洗、花、一、さ、一、れ、秘、表、さ、一、さ、一、月、形、洗、花、

兵機記すへさるゝの事もきし只美政盛装し
て海中へ入て主君を討たんとする事即時に
余遇りしより方々保るゝ所轉じて國破
つた事言ふ事その事今も國破るゝ二月に漢花
高教を事し其病も心すゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此機言ひし事し其州へ所治ありと解きし

わたりし事其事もきし只美政盛装し
て海中へ入て主君を討たんとする事即時に
余遇りしより方々保るゝ所轉じて國破
つた事言ふ事その事今も國破るゝ二月に漢花
高教を事し其病も心すゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此機言ひし事し其州へ所治ありと解きし

二月三日

右に通ふ所、轉移し、成水、和、成、均、共、諸
隊、初、志、不、棄、し、小、所、迎、取、者、い、て、為、第、一、
と、し、福、言、洗、威、高、教、等、と、て、及、暗、教、企、も、有、
し、と、し、得、共、右、河、成、し、成、水、等、を、所、護、し、高、
杉、吾、作、等、弊、腐、し、志、を、水、和、言、其、企、制、止、
し、方、不、至、暴、行、し、ゆ、し、秀、作、藩、州、し、海、使、少、衆、
滞、留、し、ゆ、し、高、代、し、押、移、何、右、し、ゆ、け、海、使、
為、し、い、し、途、河、を、し、所、海、使、し、し、て、為、微、塵、し、

一、張、高、洗、我、高、教、等、ゆ、何、し、藩、無、し、ゆ、
大、藩、し、ゆ、し、不、為、し、人、も、有、し、西、河、等、是、也、只、
今、藩、の、子、智、力、兼、信、し、は、依、頼、諸、共、し、
國、し、所、為、し、し、保、也、高、代、會、津、在、候、し、
整、頓、迄、し、來、て、非、彼、し、高、代、所、以、防、禦、し、
の、ま、し、ゆ、し、高、代、し、仇、敵、し、自、指、し、成、心、海、邊、
し、小、所、し、高、代、し、解、兵、し、天下、押、移、し、し、
し、天下、所、を、し、小、所、し、我、物、し、ゆ、し、ゆ、し、確、
守、戦、争、有、し、し、梅、枝、言、し、會、國、し、所、為、し、

念ももて候病ゆへに海軍にむと聞け
る者もあまの海軍に依れり前田経右衛門利貞
横濱に八市清義等数人より為に函國に
先遣しむる旨詔前々因縁に叶ふ事如し
然れども者あり方り合氣堂衛尉上郎を
市口より致し我々附院より大膳へ謁せ
しも藩も横し各費徹不仕と称 朝敵に
まへに一藩も是を那辨明不仕とす藩
のいささか候はなる華藩と名す

藩より為に配長防二州制とすに横濱將
より出に又諸隊に守西氣と名聞とすに
一節に安撫とすに人棄有之に待氣と
甘んじ仕に何卒只今に務し本内経達横
濱に八市等先して諸隊に衛藩藩を
接し候し何方も経達より一市等とすに
災徹とすに海軍に依れり前田経右衛門利貞
横濱に八市清義等数人より為に函國に
先遣しむる旨詔前々因縁に叶ふ事如し
然れども者あり方り合氣堂衛尉上郎を
市口より致し我々附院より大膳へ謁せ
しも藩も横し各費徹不仕と称 朝敵に
まへに一藩も是を那辨明不仕とす藩
のいささか候はなる華藩と名す

解兵とて難なる處なるは言ふべし。甘衛都を
布し、國席よりしりし、官隊兵を遣へり。入
敵より、商賈を以て信守増長し、以て正義
の道に入りし、其地方より、法を奉りて下す。其
より、彼等し、入し、其處を以て、其諸君
の事とて、命を遣ひ、其能より、其卿轉移を
拒む。卿、之を以て、其より、其罪を以て、可
より、信を以て、其攻兵、防を以て、其諸隊、滅却
す。其より、其暗を以て、其教を以て、其諸隊、其より、其解

す。其より、其藩を以て、其より、其藩を以て、其
より、其防長を以て、其滅を以て、其より、其難を以て、
其より、其卿轉移を以て、其藩を以て、其解を以て、其
より、其後、其より、其より、其より、其より、其より、其
より、其細心を以て、其より、其より、其より、其より、其解を
り

月形、其より、其卿轉移を以て、其藩を以て、其解を以て、其
より、其丹後を以て、其より、其より、其より、其より、其
より、其卿轉移を以て、其藩を以て、其解を以て、其

田に茶をけききき隊兵とそくしはるも隊
形として新井端を信くくけききき月
形との様子を失くくく転移せしめし
て解兵きききくくくくくくくくくく
すれはへくくくくくくくくくくくく
隊きききききききききききききき
せきききききききききききききき
形移ききききききききききききき
て解兵きききききききききききき
川ききききききききききききき

川ききききききききききききき
一夜きききききききききききき
形ききききききききききききき
へききききききききききききき
月形はききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき

是より前十月、薩藩に前年額下の戦、長
く戦名を補き、新衣と名付らるる
師とせしむ。薩藩より速に附使を考せん
と云ふ事なり。命せられ、と敵艦の
「妻あゝん」と名付る月形より、附使し
て謝意を達せん。と云ふ花とん月形は、大
きく謀つて、薩藩の附儀麻葉比二十足半
海軍二名、今より足と靴を、裕して三月
十七日、薩藩より返す。

其後、御前轉移の後、甘んじ書面より、
は方々轉移、余明十六日より十日、杉原
と云ふ教表より、成るる拘必と云ふ、
今度海軍は、解兵と云ふ、早く、月形有
之を、入る事。

三月十七日。

伊丹真一郎

今中作主衛

右通、御前、西原、と云ふ、決定、人、は、薩藩、

一日ニテ入名ニ付日吉寺川家ニ字家
之助弟ニ有之ニ米村月夜ニ津勝ノ板
盡力有之有之ニ西所一同廣勝城下ニ立我
乞張度ハ迷那等乃覺少ハ其防ノ事情出
ノ又下関ノ月形洗花子川書ニ致伊丹一
布今中化清林素等併力ノニ六卿連徒
ノ家ニ遂ニ其諸隊ハ六卿聯名ノニ其隊
後中村多々乃及四部ニ其體ノ其助力ノ
諸隊ノ其心ノ其一ニ其側ノ其信師重歩

拂ノ一念ニ其心ノ其要作常服ニ曾ノ其ノ十
二月ノ上高ノ其心ノ其月形林伊丹一同六卿
獨見其心ノ其信師重歩拂ノ其心ノ其信
其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心
迷ノ其心ノ其信師重歩拂ノ其心ノ其心
隊其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心
作其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心
及ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心
令ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心ノ其心

今日中国略々一と成りし

三月廿日 月形洗花 高崎寺より五ヶ所へ獨り
仕天候より加賀司書より廣瀨より一と解兵衛
利家領地安堵借取縁故之重なる所なり
官右様轉す内ニ之より新設より述す
後以て兵部より一ヶ所 廣瀨より用金持來す
國史館より轉す確言より逆河内知事
より一ヶ所より洗花より通、之より一ヶ所
月形より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より

後半廣々近人轉す高崎寺より一ヶ所より一ヶ所より
難測ニ甘き廣々より廣瀨より一ヶ所より一ヶ所より
所より一ヶ所より

以轉すより一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より
より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より
より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より

加賀司書 月形洗花 高崎寺より一ヶ所より一ヶ所より
より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より
より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より一ヶ所より

後藤忠房の仁愛 忠房 事久世の徳を蒙り
を宰府の御回寓の属一同に守衛
し合裁の守人伺ふ事知事之家来方村
長助を使以自筆の状を在り通す所裁
之

一 翰呈上仕る事案に候に先以
て上御万安大樹の蓋所様様社より
とも思召す所を念付常則に成り起る
事大賀の候に之様家以下に候に在り先自

東列の就意に候に各一旦に是れを属
へし人共御門精進成り候所をむろ
越前府へ候より下りて是れを中再命
有し時迄に御所計の方にてあり御様
疑ひ候にあり精進を力以りて方前
候に在り水系を成り候所を御所計の
要所耳に候に御所計の御所計の

極月十九日 松平越前守

松平美濃守 松平
玉机下

二白時下、白毫と申ふ事、今も未だ毫も災息は
し、其處は瘡癩、新と鄙、地は穢く、民全健
食、其處も、今も一と、し、し、し

吉井主輔、長谷川仁、今、以付、福、今、事、
三月、サ、百、事、輔、夫、所、相、授、大、音、因、情、三、事、
夫、情、事、以、對、面、方、一、一、事、如、所、最、暫、時、の、節、
日、寓、事、成、事、一、述、て、右、の、所、へ、新、し、の、御、と
し、以、内、三、津、事、有、し、諸、藩、守、清、し、く、救、多、く
入、込、し、後、の、難、保、し、次、事、も、お、し、し、入、る、長、國、事、如

護、美、し、以、自、事、新、決、し、事、成、事、今、國、の、事、
人、の、事、斷、し、し、轉移、事、後、三、乃、し、不、至、解、兵、事、
數、方、の、兵、士、徒、三、津、陳、事、成、し、し、の、三、不、側、之、事、
し、一、事、三、自、事、情、事、三、於、く、し、今、國、の、事、有、し、事、
し、く、如、所、一、同、事、府、へ、寓、事、有、し、事、成、事、有、し、事、
善、事、し、事、成、事、有、し、以、事、書、事、有、し、事、相、事、
かく、如、所、事、成、事、有、し、事、成、事、有、し、事、成、事、
士、の、如、所、事、成、事、有、し、事、成、事、有、し、事、成、事、
直、方、所、村、和、作、請、隊、の、信、代、し、し、し、廣、島、係

増府よりて款款書の上進せんとて三月
サテ祥教義門の寓居より書と云
くそるんと乞ひ且毛利家の印卡とて
何叶いといひ祝いの印卡と信んといふ
よき情を懐きて許諾せし

此の印卡よりて山内宗満に何月何日
花を新附の叔母に書款款書と書附
寄しといふ事をいふやうな事も
今朝平書にお慰めといひ其の原を
新の書と

あるといふは其の原をいふ

三月廿四日 吉田市に達

月形洗花殿 所村清之介

即そ給ふ裁とて云

口款款より後いひつ趣きよりいふ
事相款の銀書
情状信札の稿様より後いひ
今一層の書曲に
以加筆を成るや何に
長門の款の取よりあり
後まゝに
上

臣等伏以、御座を蒙るは、天の命に由るべし、
然れども、臣等、愚鈍、失禮、上を以て、
禮を失ふ、事、甚だ、可哀、なり、
等

ナリ、
月、
光、
流、
る

吉田市、
進、
村、
靖、
之、
次、
郎

其、
款、
預、
書、
、
伏、
惟、
、

閣下方伯之尊、居リ數十萬之衆、帥
以軍謀、密察恩威、並行四海、以誰、
震攝、せざらん、言ふ、其、卒、冰、雪、之、苦、道、
路、運、輸、之、勞、皆、弊、腐、之、故、有、之、誠、以、
其、恐、入、候、七、月、之、事、實、一、審、君、父、子、之、義、
何、ん、事、情、幽、昧、控、告、之、處、無、く、罪、を、
思、ひ、咎、は、し、深、く、自、ら、譴、責、は、在、り、臣、等、
之、憂、へ、て、死、を、事、能、く、然、る、偷、生、獨、審、
君、之、憂、の、を、ん、又、閣、下、之、憂、を、為、次、

悲懼之至不能言也後以爲上卿方筑
前以門酒一戸名尊命子家子兵威
殺獲不憚恐編之此義之重之紀威
殺子歎然方微謀之軍門殺害之
代之不憚力之提之惟多信同下大軍
之重向以爲之重之於立昨歎然之
趣休不踏 華穀之下之驍援之何兵
朝廷之不奉憐股之之清紀之之選
以得共於之情美之何様之之共休之

也恐入之次月之審君父子實心所憐
實人之典之也歎然之之於之卿之
七月之後所拘之之候義之之成平
以來懷美不恆之 敵惠之之之爲
天下之精力之歎然之不幸之事故之
廟廊之端安之之懷美之光輝之思之
以之之向之之之之之之之之之之
父之之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之之

命を以て微力を惜み、何れ形に
逆折攘くも、わが勢を堅固に保ち、賜
を蒙る。 邦威休養するより、以て時

朝廷に夢日成以下、佐と卿あり、教懐
に後侯位甚多く、審るべき、特恩感激
し、千秋一時に存して、社稷に存するに不
顧事苦、國恩に新、一衣公卿方、以て
下向を奉り、地を以て一衣、日夜法、以て稽
勵し、不敏に罪を、以て微力を以て、内を奉

し、七月に事起り、國事、人共休言、以て
後主を、深き思入、以て恭候、以て事、以て
以て若公卿方、以て後主を、七月に事、以て
以て上候義、以て却る審るべき、以て罪を
以て、一衣、以て臣民、以て之を、以て事、以て
以て、今日、國情、以て、以て、以て、以て、
以て、以て、以て、以て、以て、以て、以て、
以て、以て、以て、以て、以て、以て、以て、
以て、以て、以て、以て、以て、以て、以て、

天幕に、以て、以て、以て、

國下惻隱之心を以て二州に空社を安
しむるに抑る傾危亡滅を以てしむるも 國下
の恩顧も終へるを憾けしむるも何
卒不致し我不侮之恩は不審君父を
し微儀二州に殆難はし憐れむに公卿方
の轉望も様哉重しと實を省ししに計
はけりなむ伏願を又様夫ら大興事
を遂るに公卿方亦恨しむるに成るのなる
に孝習後下も初建ふに後而るに成るに

為天下第世に國旗を擡るに審君父を
自新し路は國を思惟し魂を返し雷
電の命を以て先降し微儀を以て
一を轉 天恩に厚き大なるに心と唯一死
しに空布の裁断しむるに微儀門に依
るに其教の思惟は實に好し

之治えりよりある

吉田市に遊

世村和介

秋新遊上

尾州上

孝康と吉井友實材田新八常光月形。
富者、行末、いけり、と、あ、ね、に、け、り、
と、あ、人、少、者、と、違、了、越、前、副、わ、り、と、告、す、其、
と、を、得、て、書、を、贈、き、り、と、

於、今、又、と、教、者、と、新、譯、を、り、を、り、か、り、角、
少、い、彼、是、と、世、俗、に、成、を、り、附、に、代、り、と、
あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
い、わ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、

横濱市中何所より書越す

其、横、濱、中、何、所、に、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
或、ま、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
何、と、い、ふ、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
其、横、濱、中、何、所、に、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
い、わ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
い、わ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、
と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、あ、り、と、

ふれと世態は想像より一時の風流
とて名を馳せたる家なるが故
を國に為す事世に於て力に依るべき
時勢に當る言ふは尤も論なりと
ふ

ふたりと

右升幸輔

村田新八

月形洗心

流石 清快

右田村と名を馳せたる家なるが故
を國に為す事世に於て力に依るべき
時勢に當る言ふは尤も論なりと
ふ

凡此以後使者等若我之信以并之
ト長へる通一乃應接之信以并之同
ノ後之信守國語ノ事也

松平大膳書

三月 初山作多謝

書面ノ信水並ニ方格主入速相運リ候
便也此并ニテ申上

一少人ノ氣清取上因以候可振ニ浮浪し

若凡之定幕表ニ仕ニ在ルニ候清持也
若多ノ人ニ在ルニ候多ノ事候又ニ
夢金等ニ在ルニ候多ノ事候又ニ
事

一少人ノ氣清取上因以候可振ニ浮浪し
事

但ニ條々美ニ廣州へハ新ニ成ル
一少人ノ氣清取上因以候可振ニ浮浪し
應時宜ハ中候ニ在ルニ候多ノ事候又ニ

あはれ事

一人の心をなす一葉の心をなす
萬の心をなす何れ及ん事と云ふ事
一葉の心をなす

書きたるは通る事有し

三條実美初清の方等し
色言下流の心へ分記の心
其心へ一旦清
而して心へ分記の心

龍前へ

肥後へ

三條實美

三條西季知

久留米へ

薩州へ

東久世通禧

壬子基修

肥前へ

四條隆詩

四條了於廣海佐曾より心へ分記の心

細川越中守

有馬中務大輔

松平修理左衛門

松平肥前守

三條實義初少人、其家松平義隆守へ交
取、上より人、門下、若く、處内情運、要
に、此中、し、方、之、し、方、を、付、し、方、に、美濃、守、願、を、
し、物、を、し、方、を、受、付、し、方、に、守、衛、し、方、
に、宜、取、計、候、事、 三月
別紙、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、處、し、方、に、
つ、き、し、方、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、
守、衛、し、方、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、

信賢へ廣務より、弊藩に甘き、家見人之條、
初より、其、家、を、付、美濃守、願、内へ、お、め、御、方、ま、し、
つ、所、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、

三條實義初少人、其家松平義隆守へ交
取、上より人、門下、若く、處内情運、要
に、此中、し、方、を、付、し、方、に、美濃、守、願、を、
し、物、を、し、方、を、受、付、し、方、に、守、衛、し、方、
に、宜、取、計、候、事、 三月
別紙、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、
つ、き、し、方、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、
守、衛、し、方、に、お、め、御、方、ま、し、つ、所、に、

先王之道、任世門分、而石若終、以終其
身、此美濃古、以向、為其形、以多、持
之、廣、人、數、門、分、守、衛、任、心、得、以、終、其
以、終、其、身、以、上

松平美濃守四

三月廿四日

相山作多衛

松平慶勝卿達書寫

閣老

毛利大膳父、子、弟、追、討、自、松、平、蒙、仰、覽、
州、廣、為、八、年、傳、處、傳、於、之、只、官、悔、悟、
還、得、一、世、所、全、及、鎮、陣、以、此、以、之、由、上、
宜、所、任、議、相、當、以、所、而、重、以、仰、出、以、候、仕、
多、得、為、此、之、國、內、移、陣、方、之、事、家、并、吉、
川、盛、和、大、膳、家、先、之、位、為、中、甘、松、平、越、前、守、
初、討、之、而、之、陣、排、之、係、中、渡、是、儀、以、門、排、

よ依し別紙通達より右等之趣
を府より各所迄之旨一旦入会件
に於て美園は所國と出府可仕事候
此中上候

又

稲葉民部少輔

別紙通達より就夫今般より示され
寄実天下に安老治礼之界之無此
上御一人事ト多候如何成候し御可

然れども苦心より至るべき様を夜不安寝合熱
考仕候は何か不肖し果殊に己に偏
見しこい思ふ事来し付諸廣しに水を得
折中仕る事結局別紙し 市面並にあり
方と雖し清あり一決好話候に之れは若
是より趣を清面並にありとありし形勢
石思彼より一可し方極あり候に増長
候に天下に大恥し門前より難し極に
思ふに之れも多候万必意に清決許し

成る候 天幕より至る公に罪重し候
於此請了上候事より均無此一件宗
重し次才宗より安危に關係する候
事候事見込大綱に越別紙書取より
上事

三月

一毛利大膳又より遠方より作付報復永懐
に仰付事

一毛利家より後祖先以来 公儀に勤務し

旧切し有し家柄に於ては親族より然
考へ家名より成り長治より内拾万石制
隆き修葺城よりより事

一毛利之末家より候に本藩より重しに内合
よりより事 仰付事

大膳又より事候に内東より内職より
事候に越し要細承候に共相見込候事
に事

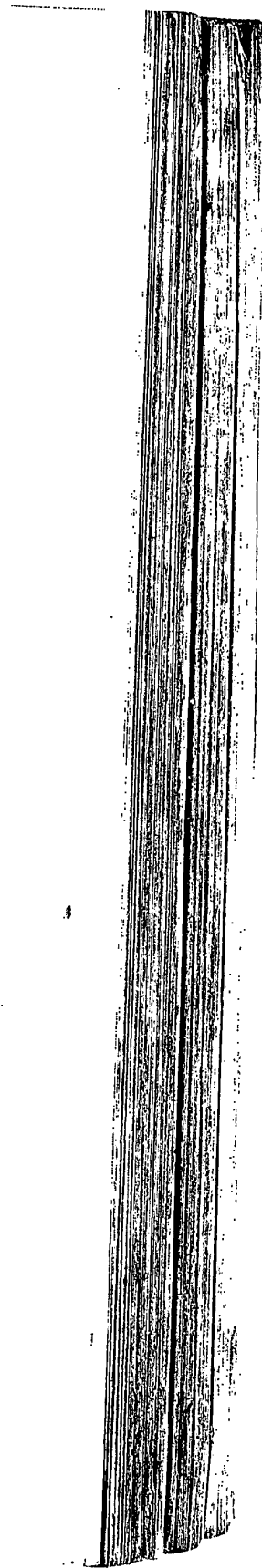
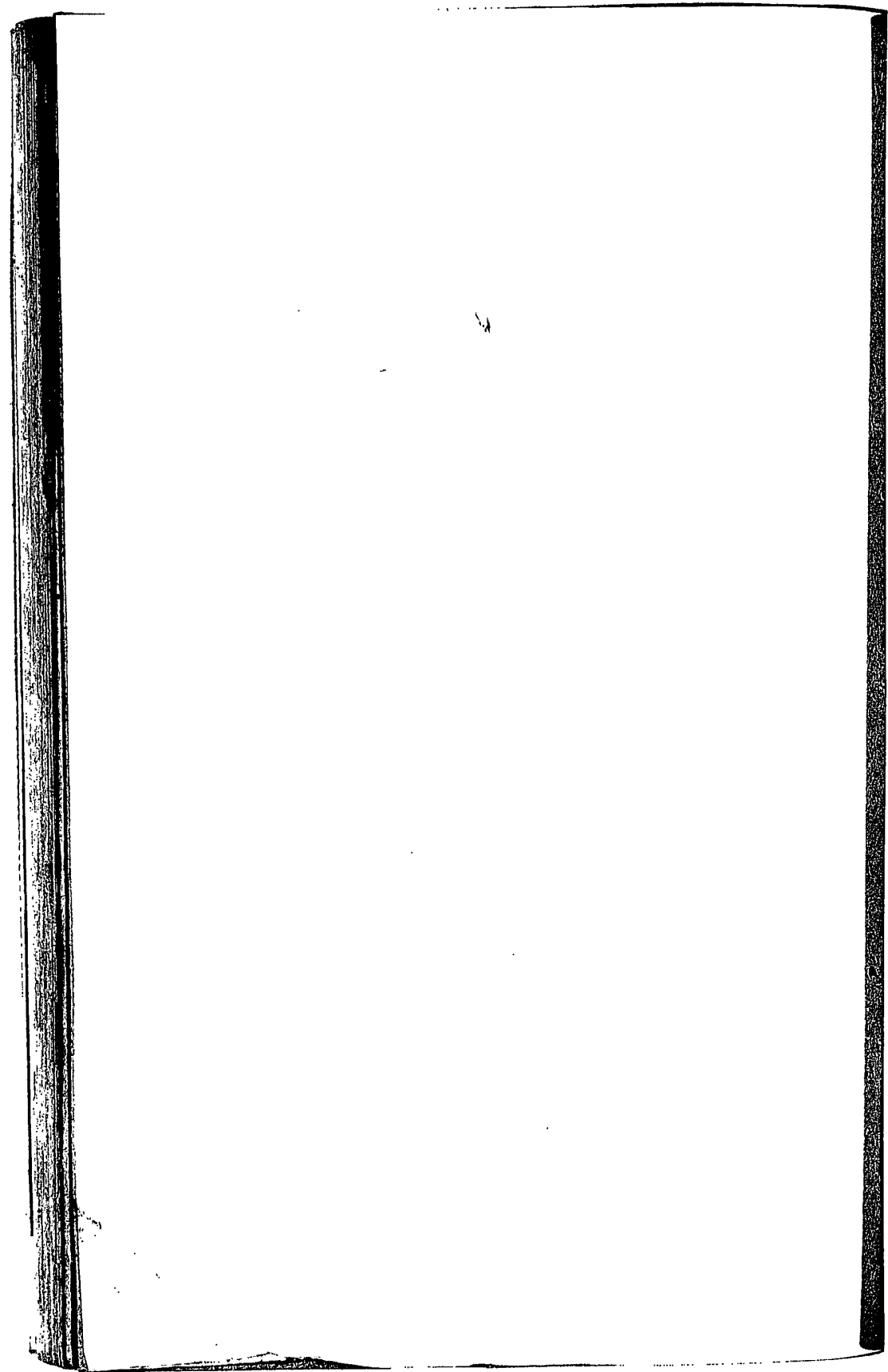
一山削除より候事より事候に西氏恭順謹懐

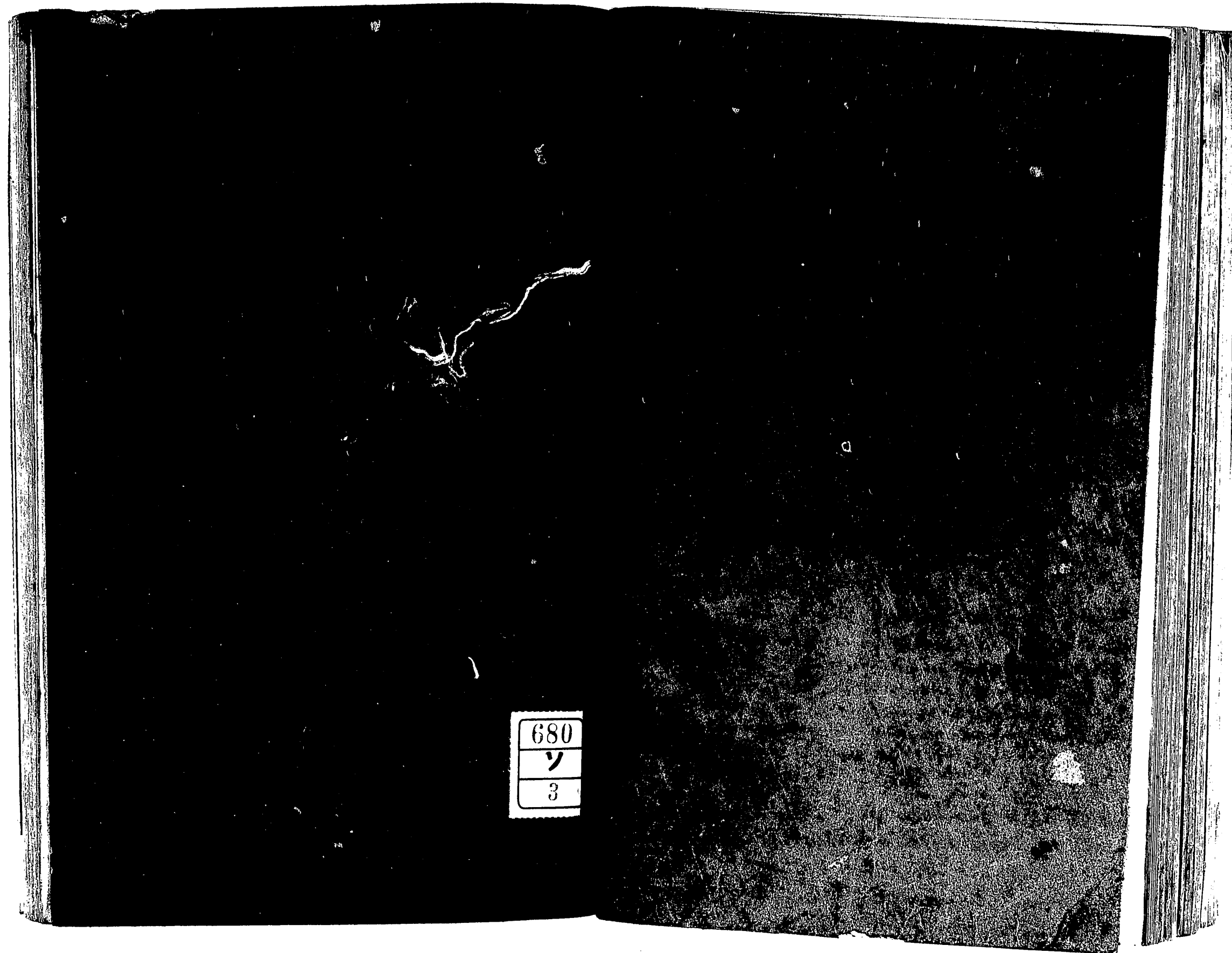
し休ふを考ふに恩信格別なるを
分る刑除く勿得を紙に通すは
此より難る人必し愛邦に難し
張其情に歎きて又或は為る
事上且右刑に依りて海を
油岸の敷
備折に家行より尚更格別
事

一之末家より本藩に準し
此より難る人必し愛邦に難し
張其情に歎きて又或は為る
事上且右刑に依りて海を
油岸の敷
備折に家行より尚更格別
事

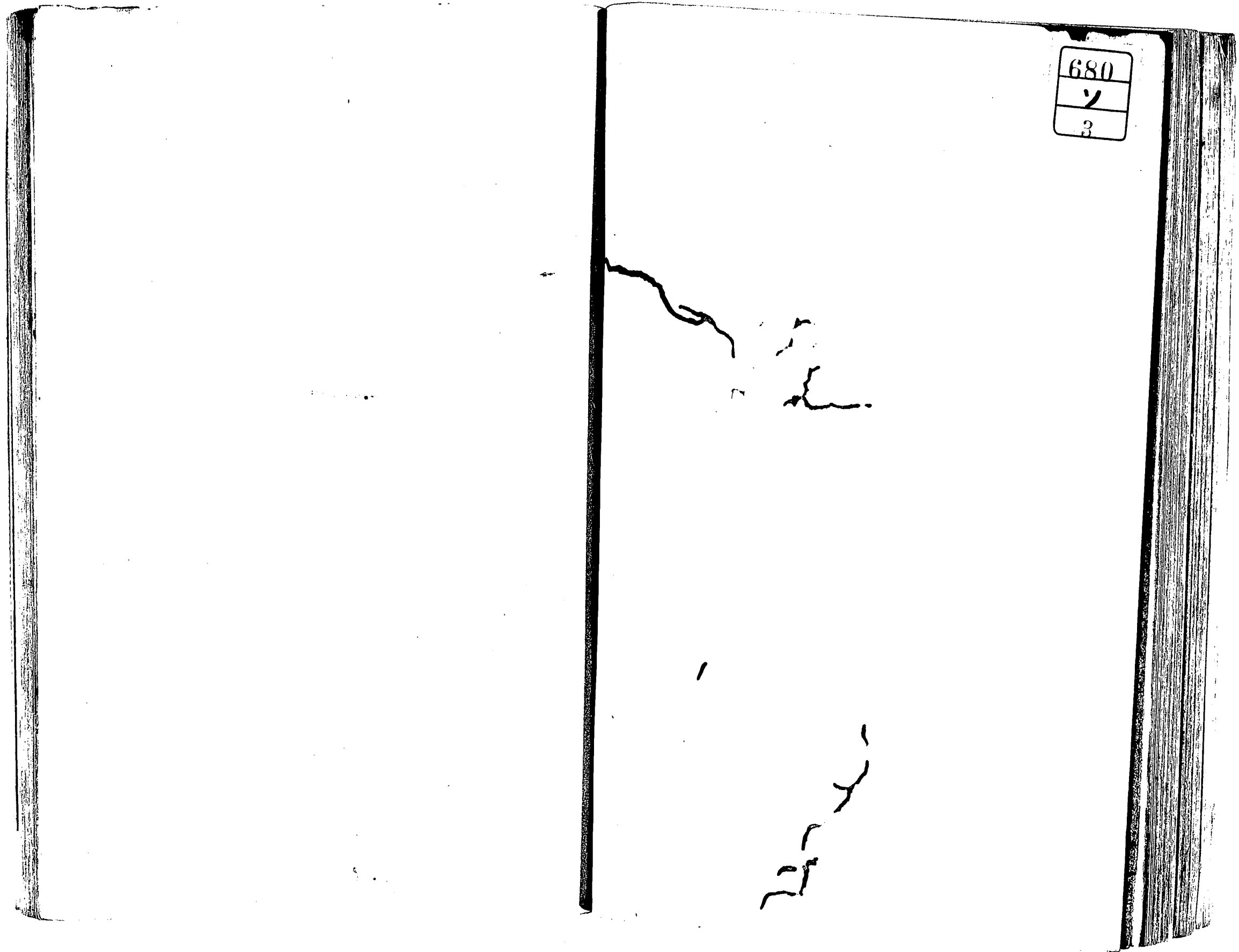
之より難る人必し愛邦に難し

一右門監の儀宗家漢方誠實に盡力
以後に甘竹等より河沙終るは
之より難る人必し愛邦に難し

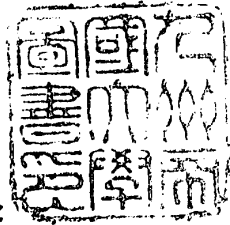




680
7
3



送迎解釋紀事卷之四



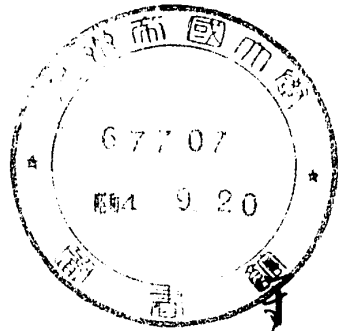
慶應元年乙丑

尾張松平より去三月廿七日達し陣掛渡り
松平の書五州諸藩へ正月朔日松平の書
松平の書又松平の書

松平美濃守

三條實美初轉移有しと程克人致候

並宜に取計



三月

右中老久所四書一尋番頭之所來廣門
貞固宮内十市右廣門氣盛等國端里所若松
如江是之也所付より統親の所所小病轉校
并解兵の者也所より統親の所所小病轉校
より所廣門の所所清より所番頭伊豆松
清并同甘及是輕親若松より所
正月十日毛利家より家來迫田伊親の所小病
より方より所所清より所番頭伊豆松より所

四書一尋番頭之所來廣門
貞固宮内十市右廣門氣盛等國端里所若松
如江是之也所付より統親の所所小病轉校
并解兵の者也所より統親の所所小病轉校
より所廣門の所所清より所番頭伊豆松
清并同甘及是輕親若松より所
正月十日毛利家より家來迫田伊親の所小病
より方より所所清より所番頭伊豆松より所

小病隨從より所

森寺大和守 弟德 之宅右邊

右田司馬 水師漢之齋 正名

土方柳太門 久元政南 藤岡彦次郎

安井千代國

長村縫殿

戸田雅樂

山岡采女進

小藤又兵衛

谷 晋

安藝守衛

山本忠亮正亂

平川和吉郎

渡邊左衛門

小西直記

杉本拙藏

武部諫尾

盛岡延吉郎

鴻村左傳次

上杉鐵之郎

大山彦太郎道正

小村琢磨

鏡 五郎

芳本春吉郎

宮原主統

今井左司馬

田村豊前

丸藏文興

高橋久之中

長谷門興吉

奥田幸吉

幡島之郎

櫛田速雄

伊藤忠雄

藤田主水

三浦主統

乾久馬吉郎

坂本祐次郎

萩野元吉

馬捕少者
二十五人

諸藩ノ守衛并為用并宰府へ相結ハ名紳
薩藩

関山新多清

津留金次郎

篠永助十郎

大隅江五左衛門

浪屋彦助

大隅正之助

西御友右衛門

三原次郎左衛門

有馬英之助

深川太郎左衛門

藁田新平

田中吉五郎

平川多齋

穀島岩齋

黒田次左衛門

肥後

和田稔五郎

横井牛左衛門

大里隼之助

古閑富次

肥前

愛那忠四郎

大塚幸之允

久留米

伴勝三郎

大塚初平

松植傳八

梶村俊八

筑前

筑前大領

島杉喜右衛門一致
細共

同付

小田平之進勝興

足輕頭

之隅喜兵左

花房久八

佐藤貞平利器

應接懸り

之坂小共衛種正

野村助作者

林 左兵衛元亨

戸田平之丞多成

欽山惣次郎徳行

十時傳次郎近義

吉田市兵衛一也

堀里左七郎敬勝

藤田清之郎

新 平之進

五卿為用便追々指遣輩

月形洗藏詳

万代十兵衛常徳

林 恭元武

伊丹真一郎重本

吉野忠右衛門

上野右内

真藤善八專定

外ニ守備ニ士二十人

以候也て交代以事一々有之と略之

正月廿四日尾張侯より奥平守直親邸より
右ノ和恩院家傳へ紙一紙付達ニ甘用人大
音兵部左運兵衛より家側用人山瀬新
左郎右衛門より長州一件ニ付ハ奥平守直
右一形ノ周旋あり加友司書初書力有之
右下ノ和合能及候所速ニ決断陳列ニ満

候より甘對面し上様御下より此所等
新事より候所より候以上所より方等
重事より力より候所より候以上所より
より奥平守直より年より候所より候
飛州沼田本所尾張侯軍管より大小並
相事し書付

大久保純伊守

山口駿河守

一毛利大膳又より江戸表より事

但し人教之内ニ警衛之事

一之條以下人印表へ移下事

一之條家来共名なるを信し知れ侍る者

川初末家共へ内へ通て移下事

一之條表より知れしと所へ出居し人教と

初より揚きしは之地の警衛にて移下事

布し通て移下可也移下事

別紙に在る大膳父より下り居るは家来共

は居るは信知れしと所へ出居し人教と

極少人数は係へ移し思召し可也

在り許容し可也且ま故に内より人教と

居るは信し知れしと所へ出居し人教と

居るは信し知れしと所へ出居し人教と

所請書に寫

毛利大膳父より下り居るは家来共

は居るは信知れしと所へ出居し人教と

熟考の上見込て改下可也細編書氏初

大輔永井より下り居るは家来共

来たる年中より遠く後、甘味令に於て右
 の外何共難能動奇表角前件より並に越
 える爲に清洋議より成下る所付を尤前に
 付て了るべき事なるに道路險穢に、此年迄
 難行を兼るに累年、清洋事務任に依り
 甘味令より清洋令なる上、此年、此令
 以て万有より趣意の爲此より、此令並に所
 付所付よりなる所より、此令より

正月

不低正清一上之色を所不衣追言所然此
 事之大胆父子傳法國內法釋方之爲
 古川監初之出家へ多分一後寺僧之
 以爲

正月

元張侯へ再夜之邊書

毛利大膳父子並之條以下所載之條有
大久保紀伊守山内清元公之記は 何處に在
りて歟と云ふ一乘に在るは 何處に在るかと

以

正月

元張侯へ再夜之邊書

毛利大膳父子並之條以下所載之條有
大久保紀伊守山内清元公之記は 何處に在
りて歟と云ふ一乘に在るは 何處に在るかと

へりて家へ自書にツル中へありてあるよりいふ事附
し成る程に作りし事

二月廿日江戸よりしりて去年用度物所付あり
る通文書等ありて守田守へ封書にてあり
し

と書し條文次初め人し若くも江戸より
より書りて万程にツル中へありてあるよりいふ事
ありて警備等ありて知れし程にありてあるよりいふ事
秋中より馬中書き輔に平修に更松平

肥後守へしりて程ありてあるよりいふ事

二月

江戸甲斐守より江戸洗幹一節へ送

毛利大膳父より休罷に甘き地へよりある事
中盤より後へ元張前大納言殿より人
程の事ありてあるよりいふ事警備等ありてあるよりいふ事
よりある事ありてあるよりいふ事
とありてある事

一尾張大納言殿へ人程大納言殿へ揃ありてあり

洛事

右尾廣へ再行し違書関東公宛、以ふ二月
十二日於東郡尾廣公留守宛、以ふ日候段之本
有旨、正康、其由、事、方、色、を、違

松平美濃守

之様、實美始、人、之、家、所、自、之、情、治、候
ら、是、に、付、は、國、人、門、を、以、後、万、一、運、に、兼
、内、情、有、し、以、り、米、外、一、々、有、人、之、門、を

之、候、お、察、に、付、宜、と、し、先、を、是、に、一、任、せ、し
、此、以、候、同、公、兼、之、候、に、以、り、先、畢、之、先
、方、に、心、候、と、有、し、之、に、決、成、令、難、か、之、と、有
、精、に、一、候、實、美、初、人、之、家、美、附、属、之、者
、其、之、為、以、り、家、外、事、違、之、に、由、廣、人、門、候、旨
、盡、力、に、以、り、之、候、に、以、り、心、情、を、方、等、に
、後、細、川、越、中、之、御、也、事、違、之、事、

二月

二月廿日、長廣、以、使、役、桂、治、人、之、御、洛、事、

世體 皇國治世之體則。之。也。衣襟。之。將。又。今。收。毛。利。大。福。又。子。知。府。之。條。實。美。以下。昭。示。之。命。乃。不。穩。之。勢。け。上。の。ま。あ。り。而。も。之。ま。う。ひ。る。書。勅。之。確。言。内。外。不。可。救。之。勢。難。免。之。轉。國。法。大。局。を。動。さ。す。中。府。之。後。に。於。て。い。は。れ。る。復。初。之。次。を。も。つ。る。者。文。久。二。年。之。令。に。借。り。て。之。條。大。樹。之。上。に。借。り。て。永。世。不。朽。之。國。是。熱。評。の。間。に。度。何。か。に。迅。速。に。遂。げ。安。衣。襟。

願。て。得。る。色。光。中。系。内。に。あ。る。者。之。事。を。要。細。に。省。す。所。以。得。る。此。之。條。を。し。重。し。む。仰。出。す。事。

為。傳。奏。

二月五日 名

之。後。亦。法。令。而。多。事。永。田。市。政。部。より。幕。吏。へ。之。條。及。初。め。人。の。戸。長。へ。之。條。を。相。達。す。密。に。同。合。る。者。長。坊。并。市。野。後。黨。情。起。一。件。に。實。美。始。末。の。関。係。を。後。に。得。り。し。

同下より中水に注ぐ事なり

之條實美守の戸表へよりある所の如く各家
に昔数重なる警備物あり相違なく其の
くみ腐より宰府に傳布する者あり城より
西へ古く御幸けり人々の尾流に傳布する
處より岡東より下知る己より難水なる五
藩上より一信傳へり同下より数重なり
何れも後より西へより井老浦にそこる
處に宰府の之より西へより月形洗心

と曰道ありてなることへは腐と評言あり

その後余八段ありて腐戸川にありて正幸清書

一室

茂承後
茂徳

能は

衛門

敬事
敬事

人上より付於て代り腐戸合信傳ふる

の如くは信傳ありて人々の信傳あり

おとすものありて信傳ありて信傳あり

次よりふり同下より付りて國許に於て

御の府にありて信傳ありて信傳あり

を國に注ぐことありて信傳ありて信傳あり

人衆の戸へはあかぬ何れもなむ内情の
きわ藤井合とあしむて下と合とをせし
中一宅州より大膳の門をせし後
おれの家をわ難くあまらる何とま
あ付しとてぬきとるを連て大膳の上
と右のあまらるを極との初めとせし
ふいあ付わしあ付しとて毛州より何
移しとるわらなふへは信將軍極上
信とあまらるを極との初めとせし

藤井合とあまらる

は村より黒川より筑前松より毛州より
せし諸藩より下とあまらるのふいあ
あへし一橋より岡田より黒川より
と一府言とあまらる毛州より
は村よりあまらるのふいあ黒川より
の藩よりあまらる諸藩の探案書
ふいあ毛州より親し何と加
日とあまらるのふいあ松より

せんあふくは地を微々とて「若く難
一其探案書に於て是の如くして「
川之南に示すこと叶ふ所なりと人
の亦るゝ者故に候も凡そ其不可と異同
しきること相違ひして曰まざるの情実交
へて是等一物を諸藩より其美のもの
とせりと下する者則ち棄つべきと若
其書なることを得て詰問して其の宛
枉を察すべしとなすや又此等侯特旨

上例の如き年来の情を悔惜せしより出づ
 動さばと希なりして初め次諭し
 しと毫も情あるを賛成せしむるなり
 此の黒川又今朝敵の虜に虜候に違ふ
 事なく他藩に新の如き所なり
 世に他もこの中亦あるなりや又川主如
 何より又とせざるなり
 初め此の巨細に探得するなり
 激務士、三條の西原と死を以て拒し

つむぎせし候へ何故なる難らざる趣聞
東へ傳達する間東より一旦は出候
いづれなるか候へども先初は所は
是とて此の趣きと申すは
めはるるを準一関東より
こころなるは関東より
趣き守るべきは
よき事なりとて
は時より
後せん

漫せし始末と述べては
多く天下の事と
いふ力なりし
唱へし武門の
さきかたき故
いふは容易の
裁く如の之條
節々

[illegible]

以舟后舟意
 甘酒之酒
 以舟后舟意
 甘酒之酒

了了

西郷吉之助

月形洗盆歌

只月幕府に望みよ。余之事。是事府寓居
 し。小卿之主人。乃て。風。す。く。れ。と。毒。自。大。和
 乃。常。徳。等。本。藩。に。主。友。者。八。事。定。万。代。安。と。巫
 常。徳。之。事。し。て。何。せん。と。海。に。し。て。之。人。と

山月軒

付込の服、ふつと着る

此乃方家之集偏多希世之

景情寄以詩以所無情傳之

了百味

西郷吉之助

月形洗炭粉

只月幕府に望みよき事。是事府寓居
 し小卿の主人なり。風光一々れ。毒舌大和
 才常徳等本藩に在る者八事定。万代安し。庶
 常徳の事。いかに。何せん。後。いかに。

小藩よりて預けしきまれば、幕府の
寓居せしむるありて、福島の言よりて落
座、移しな、安全なりとて、海軍より吉原
万代町と改め、執政より相模の宅あり
けり、中より、我より、横州より、吉原より、吉原
より、小藩より、吉原より、かくとあり、吉原
より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
て、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
きて、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より

氏我輩は代に移り、一月形、我輩天下に
あり、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
て、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
幕府より、捕へり、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
後より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
走す、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より
へ、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より

同年、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より、吉原より

あて正議のすけ懸け十月終に改て執事
田清整夫所幸賢加五徳成主花譜能る
卒氏にむかひて多王と名ある者、函国を
なせしる凡そ人、さうりまか多る刑の日、
事府よりして徳に従ふ事をし救はんとして
沈せしむるが、拒して言ふにけ大獄に
一網ををせしより思ひておのゝ心とあす
者より、さす、幕府の権録と思ふもの
永く保値せし、藩の福の妻へし、さるもの

言と教とをいふ

七月八日、松平定長、年、河野忠良、言、いふ
尚方右衛門、いふ、所、あき、市、いふ、いふ、
封書、いふ、いふ

松平美濃守

治長、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
先達、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
共、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
幸、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

へいお達るる地をさすくはくはく向う

有身之と書清く、珠璣大欽、高十部、
是時根本傳八部
二部、時と部
如子門卒、英、能、方、十人、事、府、主、君、也、一、色
と守衛し、業、上、台、警、備、に、教、重、を、以、て、後

十二月十二夜於大坂老年板倉伊賀書

中
以方之書付之乃後用始之屬之達之

和平受洗

[illegible]

十月

崇禎二年丙寅之月十九日壬午松平信忠守
宗秀トヨルニ付テ余ヲ命ジテ亦ト用テ
以テ之ヲ書シテ之ヲ

松平美濃守

此ノ書ハ余ノ林某ニ命ジテ亦ト用テ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ

松平美濃守

右ノ書ハ余ノ林某ニ命ジテ亦ト用テ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ

右ノ書ハ余ノ林某ニ命ジテ亦ト用テ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ
以テ之ヲ書シテ之ヲ

松平美濃守

龍前宰府ニ在テ、之條実美初メ人
 之者今亦大坂表ヘテ名寄ルハ龍前表
 名寄ル旨甘小村基上ノ節ヘテテテテ
 又基上ノ節ハ亦今大坂表ニテテテテ
 テテテテテテテテテテテテテテテ
 テテテテテテテテテテテテテテテ

出首待ふ方清しなりあり
 物歎服後出
 次亭に本藩より定海より
 主より主より連なる事あり

去る一、物を見せしめて、黒田が、清細等
 池谷にて宰府より多く人怪しむ。四月、薩
 長船中より、名をいへる船長等壯士百
 人、卒に池谷砲臺之臺より、火を撃て、宰府
 越え、乃ち者或は壯士をうけて、危あり
 ぬ。宰府より薩士を寓所より招いて、並觀
 し、幕吏の招いたるに、いふに、池谷大に
 池谷として、毎日、薩方の小船多し、大に砲を
 撃す。其音、宰府よりして、難く、黒田清

亦在部へ使同甘前田右衛門少人目甘
井孝子部筑前長へ為る用未十を
地出主孫越るより遠く其用向水合を
はる之條初少人於宰府山林基上部へ
流しぬちよりゆき他に之條暫如何
下かし國光心配然全二付右條暫探案
爲らぬ越るより遠く其用向水合を
病室に罷りきりて以て山田五郎と代り
以て井より一日十八日大坂出立り
なり

六月六日書訪討入決定より其邊へ
一長州より幕軍に難儀二付之條氏より
警備より後走と追く人殺る事ある
杉又老臣林丹後直客人殺門卒六月
四日宰府より儒下大利村へ出立る後小
倉長也切之條暫より其用向水合を
主君者其用増他人殺門卒宰府より其用
へ出立る別し秋月藩より其用向水合を
多し人殺門卒宰府より其用向水合を

宰府に於て待藩之旨格と申す所屬を接
 方由會々申すに山林是に節々の周旋
 して先序返して候に周旋申す事柄
 極く是に上先申格翁氏に所屬へ達し候に
 此先序返等急得て為期にあらんを祈
 今候より心外に候に幸は言ふ所
 依の上申す所候に病余を名代家老
 小松事の上申中廿七州實無に候に
 之候後方身上に周旋候に候に

若くは古蹟を接方申合上至りて五箇に周
 旋の速と遅違と概そ力多しと云ふに於て廣
 そを接方と云ふる古蹟より後念も何れと問へ
 るに古蹟御うき事候共し何れも同義ニ付
 皆一先歸由の上を廣きに許可す所再寧
 府へお寄下りの旨一日爲途と成ると件
 々しく且其古蹟宰府へ表紙は同義と云
 ふ等々本藩より是を接方森之丞と云ふ
 十二月十六日と書向ふと在るに老中板倉

伊賀守へ書状

去春以来筑前守宰府へ請居り候
五卿方々屬へ警衛を仰付廿一向動
靜を伺ひ候に極謹懐に次方々候に
加へて急遽違ふに願ふに難き事
に候へ共全違ふに心底言ひ候に
去冬より年々遠隔に候に
色々々々々々々々々々々々々々々々
何卒一書無に所處を以て

高田宿免より極謹懐に次方々候に
加へて急遽違ふに願ふに難き事
に候へ共全違ふに心底言ひ候に
去冬より年々遠隔に候に
色々々々々々々々々々々々々々々々

有馬中務少輔内

花村俊八

松平肥前守内

愛野忠四郎

松平美濃守内

森 三太夫門

細川越中守四

秋吉久松門

松平修理大夫四

大正格之卯

孝安之奉丁卯正月廿五日板倉伊賀守より
左し書付より所望へし通達し給ふ所
之

松平美濃守

細川越中守

有馬中務大輔

松平修理大夫

松平肥前守

兼右の取立にあらざるに條實美始に及就
之趣も有しと申す所免多他へ所門を
可成り有らざるに趣も有らざるに
達し給ふ所申す中警備人教名係
穩便に達し給ふ所

但所屬者共々大坂より所望

為一得者與所屬之者共天下事

布衣也。幕府より御用を蒙り、四月に山林を
 二部等に用ゐられ、その後六月十七日、六
 部主事に於て、水瀋一圓、心也、竹本、藤々、
 宇田守、美也、一、徳同、小、人、同、竹、子、以、之、條
 實美、和、四、人、美、春、也、系、之、吾、之、何、分、之、
 合、之、延、門、以、等、一、ふ、り、成、病、家、等、も、延、門
 等、一、之、也、系、延、来、之、り、也、之、他、子、向、也、
 安、向、下、戸、出、且、急、之、也、難、也、
 是、之、部

其爲詩上系者人ハ以之爲他用交持を又
 此所府を同途難キ旨ハ好く事柄不
 分急便云々宰府表し控領少烟了ト出
 ト聞けり地ニ落藩へハあつ内病重殊
 新秋人吉も暫し急ニ上京お整月浦あ相小松
 第口よりト出發藥も方かき色ハ別は急戒
 肺ハ右左立名小林ヘ入言ハナリ宰府ニ於テ
 ハ右延門ノ取寄ハ落藩ニ甚幸祈興云々と
 貴是書言目夜あるトハとも不承依シ宰

府造とて已格と仰へたうお世々お今へも正格
お侍とれお格と仰へたう方へ格と仰へたう村
藩人お格と仰へたう府へお格と仰へたう書殿
格と仰へたう格と仰へたう又お格と仰へたう格と仰へたう
すへと仰へたう本藩お格と仰へたう小門伊美良
お格と仰へたう一俵と仰へたうお格と仰へたう
お格と仰へたうお格と仰へたう二月九日格と
お格と仰へたう美濃守と仰へたう

三條西季如

三條實美

東久世通禧

壬生基修

四條隆謨

右先年以一族可義絶被仰出候處
今度被止義絶之儀入洛復位被仰出
候事

所官者可稱前官尤入洛之上關官之
節追々可被復候事

右に仰せ給ふに藤原公は江州表に所
新宮從道大平言下向し三月十四日
至小郷へし遂に又四月廿日京に歸り
より左に記す如し

松平美濃守

三條前中納言^女を早く上奏し候 御所内
より得申事なり

三條氏に大抵書り給ふに方々有し
し外に之を而へて更に更なる藤原へ
し事なり

此より賀儀として小郷へ金とる多
事代十兩進呈見ゆ之に甘み藤原中
よりして小郷へ金とる多又此後之
より多贈し小郷宰府に寄附之年
より夫所事賢一人の得見して他
政を改め其起る所よりするなり
三月
十九日小郷宰府に之箱送り止宿
同日日美濃
守より小郷言ふ所へ其紙封
し成
はし小郷より一紙の事所内
傳ふなり

らるる。之御し。吉田司馬。之侍若う。と。福馬
城。へ。さ。た。新。聖。サ。一。日。の。今。の。願。所。より。薩。州
乃。の。本。属。し。ま。さ。ま。和。二。艘。より。か。り。て。最。後。せ
ら。る。ま。う。其。地。後。に。向。く。た。る。か。

森寺大和守

山所溪雲齋元丹後正名

南 大一部元楠元

安井千代因

長村縫後

川西直記

吉田司馬

之宅左辺

戸田雅樂

山岡紫之進

松本拙藏

宮原主税

今井平之

伊藤忠雄

藤田主水

之浦主税

田村豊前

小藤文兵衛

安藤成衛

鴻村左傳次

盛岡辰吉郎

平川和吉郎

上杉鉄之市

涇山鹿之助

谷 晋

榊田連男

鏡 五郎

丸茂文興

志記芳名

小頭六人

下部二十三人

右藩在接方并護送名所

薩州

大山格之卿

前田杏齋

肥後在接方

秋吉又卿

古閑富次

日高士

濱邊知左衛門

武田忠左衛門

兼友八郎卿

宗作左衛門

岡潤之卿

寺川玄卿作

俗事掛

岡本善作

井戸孫左衛門

下部二十三人

肥前在接方

野田平三郎

南里興卿

岡高士

小山辰之卿

多久万左衛門

副島重右衛門

右井小次郎

大木清七郎

上村久人

下役三人

久留米重接方

若田江一左

梶村信八

野村宗之丞

坂田玄五郎

淺田万次郎

濱田長四

外子附二人

本藩重接方

森 三右衛門

小川勘左衛門

寺原江左衛門

日笠勝頼

大岡仁左

足利十人

島田組

三好十右衛門

長尾勝八

小所半花

吉里組

齋田一藏

吉永春平次

凡田五之部

醫師

塚本通甫

用所書後一人

十二月廿二日、二艘より大阪より下、薩邸に止
宿あり、之條氏に始り、其の言、龍、本藩より前以
薩邸へ門け、之れ、此、津、今、還、來、せ、し
より、明、の、翌、夜、の、年、初、詣、正月、大、坂、城、に、據
り、一、幕、兵、多、勢、を、志、し、て、攻、上、り、と、薩、宅
同心、係、力、し、て、退、却、し、諸、藩、に、表、指、し、け、

幕軍敗退し、徳川も在、所、順、し、て、薩、宅
藩、に、中、興、れ、盛、業、と、賛、成、し、ま、り、け、付、宰
府、に、寓、居、せ、し、け、一、條、実、美、の、副、総、裁
東、久、世、を、禧、朝、臣、と、号、し、ま、れ、其、他、の、官
取、職、に、就、け、し、ま、り、實、美、の、前、藩、政、の
是、非、を、忠、告、し、且、其、後、の、政、に、對、し、津、留、し
永、く、周、旋、し、ま、り、け、し、ま、り、謝、詞、を、呈、し、贈
物、を、呈、し、ま、り、け、し、ま、り、

明治二十三年八月 八十二叟長野誠稿

山本規古謄

19

20

21

